

# 公益財団法人 日本中国国際教育交流協会

【2014年度の歩み 会報第21号】



- 日中交流の原点を考える 第16次訪中団
- 最高の体験 第3回教育交流ホームステイ
- 人気の音楽教師養成 第6回易県音楽教師研修

2015年1月発行

## 目 次

■巻頭言 公益財団法人日本中国国際教育交流協会代表理事 黒田文男 .....	2
■第16次訪中団（教育交流・派遣事業） .....	3
(1) 実施要項 .....	3
(2) 全日程（上海・南京） .....	4
(3) 参加者名簿 .....	5
(4) 訪問記録 .....	5
(5) 感想 .....	14
■第6回易県音楽教師養成支援（教育交流・支援事業） .....	21
【易県からの概要報告】 .....	21
■黒田代表理事らが中国を訪問（教育交流・派遣事業） .....	23
■第3回教育交流ホームステイ in 山梨（教育交流・研究等助成事業） .....	24
(1) 実施要項 .....	24
(2) 日程（例） .....	24
(3) ホストファミリー・留学生名簿 .....	25
(4) ホストファミリーからの報告 .....	25
(5) 学生報告 .....	28
■第10回日本語作文コンクール（教育交流・研究等助成事業） .....	38
★教育賞受賞作品 「ACGと日中関係」 姚儷瑾 .....	38
「中国人マナー改革の鍵」 徐 曼 .....	39
■資 料 .....	41
(1) 会報「共生力」 20号、21号 .....	41
■機関関係 .....	45
(1) 平成25（2013）年度事業報告 .....	45
(2) 平成26（2014）年度事業計画 .....	46
(3) 平成26（2014）年度収支予算 .....	48
(4) 平成26（2014）年度役員・評議員名簿 .....	49
■協会の歩み .....	50
■編集後記 .....	表紙3

### ■表紙写真

【左上】 第16次訪中団（中国福利会へ表敬訪問）

【右上】 第3回ホームステイ in 山梨（参加者・ホストファミリー全体交流会）

【左下】 第3回ホームステイ in 山梨（笛吹篠笛サークル子どもたちとの交流会）

【右下】 第16次訪中団（宋慶齡学校での教育交流会）

## 巻頭言



公益財団法人日本中国国際教育交流協会  
代表理事 黒田 文男

公益財団法人日本中国国際教育交流協会の事業に対しまして、会員の方々のみならず多くの方々から励ましやご支援を賜りお礼申し上げます。

中国教育関係者との20年を超えた交流を通して実感しますことは、「人と人の交流」が日本中国両国の友好の原点であったと言えることであります。特に教育支援は、国境を越えてもその役割は不変であります。

しかも、近年の国家間における政治的・経済的な関係が良好でない時にあっては、「人と人の交流」は、ますます大切になってきております。

当協会の事業に当てはめれば、中国宋慶齡基金会との交流はまさしく国を超えたゆえに得られた教育的成果でありました。

河北省易県の音楽の先生方とともに、音楽を通して日中音楽教育の活性化に僅かではありますが、貢献させていただきました。交流を深める中、日本、中国隔てなく、子どもたちのために教育環境整備を整える事業を実施してまいりました。易県との音楽教育を通しての交流は、5年経過したこともあり、易県での音楽教師による研修会は継続されますが、当会としましては教育関係者の派遣等は終了させていただくこととなりました。変わって、中国宋慶齡基金会と連携し、教育困難地域に対して教育支援を行う新たなプロジェクトを立ち上げます。

また、中国大使館や中国教育関係者と協議を行う中で、国内において、日本と中国、又は韓国等の教育関係者との交流ができればと思料します。

当会は、20年余にわたり、一貫して人の交流をもって国同士の友好を築き上げてきました。大変小さな公益財団ではありますが、これまで築き上げた実績を振り返れば、支援をいただきました方々への感謝と共に、継続してきた喜びのような気持ちに溢れるところであります。

今後も中国を始めとした方々との「人と人の交流」をより強くし、「互助、共助、互惠」の関係を構築するよう微力ながら尽力します。

当会は、教育の振興を目的としました公益財団であります。満足に教育が受けられない子どもたちにとって、国境という地理的な隔たりは関係ありません。

今後とも、多くの都道府県の教育関係者の方々の一層のご支援を賜りますことを深甚よりお願い申し上げます。

## ■ 第16次訪中団 (教育交流・派遣事業)

第16次訪中団は、9月12日(金)から17日(水)までの日程で、上海市を中心に行いました。各県より15名の参加があり総勢19名(含む:通訳・添乗員)で実施しました。中国側の受け入れは、宋慶齡基金会(中国福利会)で、宋慶齡学校(小中学校)での学校視察及び授業参観・交流会を行うことができました。また、在外教育施設での国際理解教育という観点から、上海日本人学校の小・中・高等学校視察及び授業参観も実施しました。上海市及び南京市の見学は、近現代における中国と日本との交流という観点から、孫文(南京中山陵にて献花)・宋慶齡・魯迅・内山完造に係わる史跡等について研鑽を深めました。また、南京虐殺記念館での研修においては、あらゆる視点から日中関係の過去をしっかりととらえるという意味で、大いに意義がありました。さらには、犠牲者への献花も行い、日中関係発展の過去から未来への決意を示すこともできたと思います。



中国福利会を訪問



南京中山陵にて

### (1) 実施要項

1. 団名称 公益財団法人日本中国国際教育交流協会派遣「第16次訪中団」
2. 実施目的 (1) 宋慶齡基金会を通しての教育交流(学校訪問・見学・情報交換)を行う  
(2) 孫文・宋慶齡・魯迅の史跡を訪ねることを通じて日中交流の歴史について学ぶ  
(3) 南京事件について学ぶことにより日中の歴史について学ぶ  
(4) 外灘・浦東・南京路等の見学を通しながら、中国の今について肌で学ぶ
3. 訪問期間 2014年9月12日(金)(羽田前泊)～9月17日(水)
4. 訪問地 上海・南京
5. 参加人数 15名程度
6. 訪問内容 ○13日(土) 上海市内見学  
・上海孫中山故居記念館・宋慶齡故居・魯迅故居・内山書店跡・魯迅記念館  
○14日(日) 南京市内見学  
・南京博物館・総統府・中山門・南京大虐殺記念館・中山陵・孫中山記念館  
○15日(月) 上海市内見学  
・中国福利会(上海宋慶齡基金会)表敬訪問・宋慶齡学校訪問・先生方との懇談会  
○16日(火) 上海市内見学  
・上海日本人学校訪問・先生方との懇談・外灘・浦東・訪中団の総括懇親会  
○17日(水) 上海市内見学  
・南京路・南京東路・南京西路・リニアモーターカー

(2) 全日程 (上海・南京)

	月日(曜日)	滞在地	交通機関	スケジュール	泊
1	2014/ 9/12 (金)	羽田		・ 17:00～結団式・顔合わせ夕食会	羽田エクセル ホテル東急
2	9/13 (土)	羽田→上海	飛行機 専用バス	・ 東京発10:05 (NH1259) →上海着12: 15 (3時間10分・時差1時間) ・ 上海市内視察 (孫中山宋慶齡故居・魯 迅故居・魯迅記念館・内山書店跡)	上海 アンバサダー ホテル上海
3	9/14 (日)	上海→南京 南京→上海	高速鉄道 専用バス 高速鉄道	・ 上海虹橋発7:00 (G102) →南京南着 8:14 (約1時間30分) ・ 南京市内視察 (総統府・中華門・中山 陵・南京大虐殺館他) ・ 南京南発20:00 (G7027) →上海虹橋 着21:39	上海 アンバサダー ホテル上海
4	9/15 (月)	上海	専用バス	・ 中国福利会 (上海宋慶齡基金会) への 表敬訪問10:00～ 福利会幹部との昼食 宋慶齡学校訪問・見学及び教職員との 教育交流 ・ 上海見学 (外灘・浦東他)	上海 アンバサダー ホテル上海
5	9/16 (火)	上海	専用バス	・ 学校訪問 (上海日本人学校・小中高) 9:30～14:00 運営委員長・校長との昼食と懇談 ・ 市内自由視察 (豫園商場他) ・ お別れ夕食会	上海 アンバサダー ホテル上海
6	9/17 (水)	上海→成田	リニアモーターカー 飛行機	・ 空港へ ・ 上海発13:10 (NH920) →成田着17: 00 (2時間50分・時差1時間) ・ 解団式 ・ 通関後解散	



上海日本人学校にて記念写真



上海魯迅記念館にて

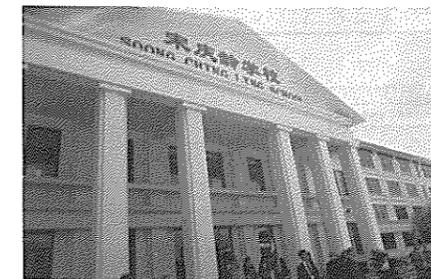
(3) 参加者名簿

NO	氏名		男女	職名
1	黒田文男	KURODA Humio	男	日本中国国際教育交流協会代表理事
2	赤岡直人	AKAOKA Naoto	男	日本中国国際教育交流協会業務執行理事
3	吉田豊	YOSHIDA Yutaka	男	茨城県教職員
4	梅澤晋	UMEZAWA Susumu	男	群馬県教職員
5	伊藤真太郎	ITO Shintaro	男	千葉県教職員
6	中村博人	NAKAMURA Hirohito	男	千葉県教職員
7	土井彰	DOI Akira	男	東京都教職員
8	伊藤東祐	ITO Yoshimasa	男	神奈川県教職員
9	押田彰子	OSHIDA Akiko	女	神奈川県教職員
10	川崎さなえ	KAWASAKI Sanae	女	横浜市教職員
11	北村智之	KITAMURA Tomoyuki	男	神奈川県教職員
12	政金正裕	MASAKANE Masahiro	男	神奈川県教職員
13	梶原貴	KAJIWARA Takashi	男	山梨県教職員
14	野村昌宏	NOMURA Masahiro	男	静岡県教職員
15	小田泰史	ODA Yasushi	男	富山県教職員
16	加藤篤	KATOU Atsushi	男	愛知県教職員
17	喜田健児	KITA Kenji	男	三重県教職員
18	徳満千春	TOKUMITSU Chiharu	女	通訳
19	藤井美和	FUJII Miwa	女	JTB 添乗員

(4) 訪問記録

●宋慶齡学校訪問記録

【宋慶齡学校について】



「宋慶齡学校」の起源は、元々上海市内の別の場所にあり1938年に建立された幼稚園が始まりです。子どもの数が増えていったため、学校が移ったそうです。現在、幼稚園があった場所は「中国福利会」となり、子どもたちの健康や成長について研究しています。上海市内には「宋慶齡幼稚園」、「宋慶齡学校」の2つがあり、私たちが訪れたのは「宋慶齡学校」です。託児所も併設されていて、小中一貫の学校です。国際的・多文

化的な環境において、世界トップクラスの教育を子どもたちに実践しています。これは、創始者である宋慶齡の「来た人を迎え入れるサービス精神」「子どもたちに与える」に基づくものであると、現在の宋慶齡学校の校長先生がおっしゃっていました。

学校の設備はとても素晴らしく、食堂や図書室、プール、バスケットコート、テニスコートなどどれもスケールが大きい設備があります。





**【食堂】**

全校児童・生徒と一緒にランチをとります。2種類の食事が用意され、どちらか好きなメニューを選ぶことができます。メニューを選ばせることにより、児童・生徒の自主性を育成しているとのことでした。

**【図書室】**

さまざまなジャンルの本が用意され、充実した読書活動をしています。地域の方にも開放しているとのことでした。

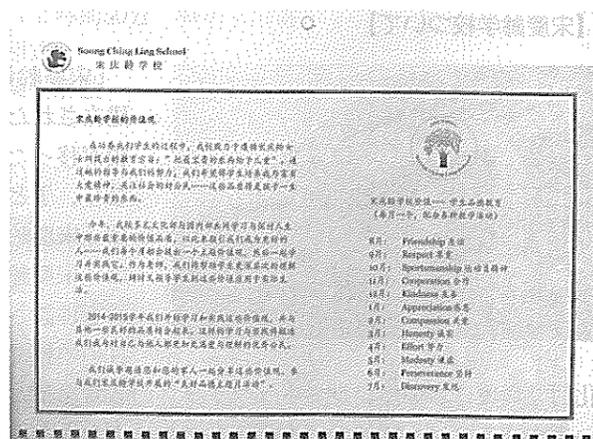
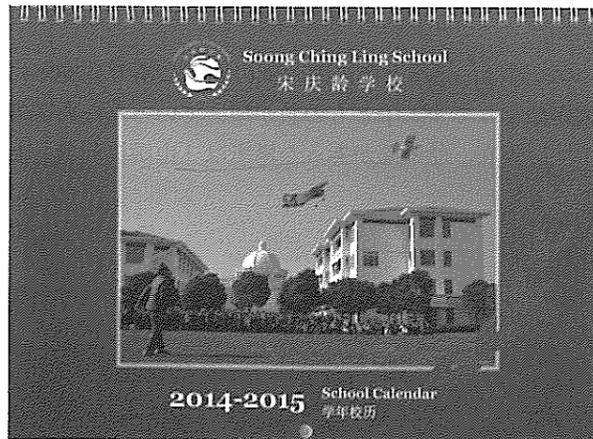


教職員は世界中から集まり、多様な授業をもたらしています。特に、英語教育には力を入れ、独自のカリキュラム（小学校1年生から）を実施しています。私たちが訪問したときにも、教室には常に英語を話す教師がおり、子どもたちも授業中は英語で学習をしていました。

英語で作成した掲示

宋慶齡学校の年間の行事予定（カレンダー）を見せてもらいました。その中にはもちろん年間の行事が記載してありますが、その他に毎月の生活目標が書かれてあります。それらは、宋慶齡の提唱してきた価値に基づくものであります。具体的には次のような価値が書かれています。

- ・ 8月：「Friendship」（友情）
- ・ 9月：「Respect」（尊重）
- ・ 10月：「Sportsmanship」（運動精神）
- ・ 11月：「Cooperation」（協力）
- ・ 12月：「Kindness」（親切）
- ・ 1月：「Appreciation」（感謝）
- ・ 2月：「Compassion」（思いやり）
- ・ 3月：「Honesty」（誠実）
- ・ 4月：「Effort」（努力）
- ・ 5月：「Modesty」（謙虚）
- ・ 6月：「Perseverance」（忍耐）
- ・ 7月：「Discovery」（発見）



**【宋慶齡学校の先生方との交流】**

校舎内を案内していただき、視察を終えると宋慶齡学校の先生方との交流会が開かれました。その中で、私たち訪中団からは次のような質問をしました。校長先生をはじめ、宋慶齡学校に勤務している先生方より、丁寧な回答をしていただきました。



訪中団からの主な質問	回	答
上海市のPISA学力テストの平均が高いのはなぜか？		数学の研究に力を入れている。ハイレベルな教育をしている。学力の低い子どもたちに対してもサポートして、全体的に底上げを行っている。
教職員は何人いるのか？		教員108名、バスの運転手・清掃員等を含めると、約150名である。
スクールカウンセラーはいるのか？		学校の中には2名いる。担任が子どもたちを観察し、相談できる体制を作っている。
小中一貫校での問題点は？		教科書の問題はあるが、継続性があり小中の中を埋めるといった意味ではとてもよい環境にある。
宋慶齡を敬う行事があるのか？		教員は宋慶齡について学ぶトレーニングがある。4月に宋慶齡の墓参りをする行事がある。
宋慶齡学校では女性が多いが宋慶齡の思想なのか？		宋慶齡を尊敬している女性が多い。教師を目指す女性教員が多い。

（記録：伊藤真太郎・中村博人）

**●中国福利会表敬訪問記録**

9月15日、私たち第16次訪中団一行は、中国福利会を表敬訪問致しました。

中国福利会は、1938年6月14日、宋慶齡さんが、香港で創られた基金会が始まりで、今ではとても大きな基金会となっていて、上海市内に、幼稚園等の下部組織がたくさんあります。現在のマネジメント事務所は、以前、中国福利会の幼稚園だった建物を使っていて、宋慶齡さんとは、切っても切れないつながりのある場所にあります。



**【中国福利会・潘燕副所長あいさつ（一部抜粋）】**

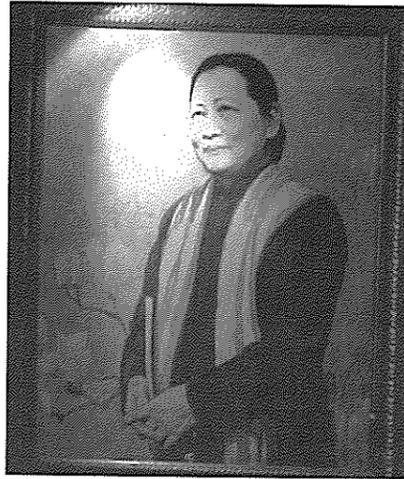
昨日から中国福利会所長は、スイスへ訪問していますので、代わりにごあいさつさせていただきます。所長は、くれぐれもみなさまよろしくと言っていました。

私からは、中国福利会について紹介します。福利会は76年の歴史があります。1938年に宋慶齡さんが創りました。宋慶齡女史は、孫文の奥さんであり、一番偉い女史と言われていて、中国の婦人・子どもの福祉に力を入れてきました。その中で、中国福利会は重要な位置を占めています。1950年に中国福利会と改名しました。

主な目的は、中国の婦人・子どものために、師範的・実験的研究を行うことです。国際的研究プロジェクトにおいて、ハイレベルな研究を行っています。宋慶齡女史は、初代実行委員会主席で、子どもたちが健康に育つことを研究したいと願っていました。現在は、学校教育や校外教育等の7つの分野に分かれて研究を行っています。

中国福利会の役割として、実験的・実践的・試験的な子ども教育を行いたいと思っています。60年間にわたって、宋慶齡女史は、自らつくった研究に力を注いできました。上海で有名な病院も宋慶齡女史が1952年につくりました。この病院は、資金をもとにつくりましたが、現在では、中国でも最もレベルの高い病院の一つで、年間100万人の患者を診ていて、入院患者は2万人、1万5,000人の赤ちゃんが生まれています。

宋慶齡女史は、中国の婦人・子どもたちのために、たくさんの事業を行いました。そのいくつかをご紹介します。



1950年には、中国福利会児童所をつくりました。この児童所は、家から通ってくるのではなく、住んでもらう、中国で初めての託児所になっています。また、1949年には、宋慶齡幼稚園をつくりました。現在この幼稚園は2つの学校に分かれていて、あわせて38クラス、850名の子どもたち（約40ヶ国の子どもたち）がいます。

宋慶齡児童発展センターでは、子どもたちの発達について研究を行っています。

宋慶齡小・中学校では、他国文化の交流を行い、20ヶ国以上の児童・生徒が通っています。この学校は、今日の午後、みなさまに訪問していただきます。

中国福利会少年宮も1953年につくりました。子どもたちがお稽古を習う場所であり、子どもたちが平和大使として多くの国を訪問し、交流を行っています。非常にレベルの高い芸術団となっています。

1947年には、児童芸術劇場もつくりました。全国初の児童向け芸術劇場です。また、1958年には、上海に、上海初の児童向け芸術劇場もつくりました。

中国中福会出版社では、子ども向けの雑誌を初めて出版しました。

2008年、中国福利会養老院を開設しました。個性的専門的医療等を提供しているハイレベルな養老院です。

国際交流も事業の一つです。

中国福利会は、国際少年文化芸術祭りをつくり、20年以上にわたって、3年に1度行ってきました。今年は7回目を迎え、60ヶ国から100万人以上が参加しました。

中国福利会は、国家レベルの人民団体です。宋慶齡女史の思想を通じて、募金をしてもらい、貧しい人々を助けていきたいです。約1,500名のスタッフで、中国政府からの補助金、事業収益金、募金の3つで主に運営を行っています。



#### 【第16次訪中・黒田文男団長あいさつ（全文）】

私は公益財団法人日本中国国際教育交流協会代表理事の黒田文男です。初めて皆様方にお会いしますが、大変うれしく感激もしております。この様な場面を設定していただきましたすべての中国教育関係者にお礼を申し上げます。特に、長きにわたり、私たち財団を支えていただいております中国宋慶齡基金会には、言葉で言い尽くせないほど感謝申し上げます。

日本中国国際教育交流協会は、日本の多くの教職員によって支えられている組織です。日本と中国そのほかの外国との間で、教職員の派遣や受入れ、教育支援などを行っています。その一つといたしまして、宋慶齡基金会との共同プロジェクトがあります。6年前河北省易県におきまして、音楽教師養成セミナーを開催させていただきましたところ、年々希望者が増え、内容・期間を拡大して行われるようになりました。なおかつ、研修内容も充実してきました。音楽教育を中心としたプロジェクトは、小さな事業ではありますが、中国宋慶齡基金会のご支援をいただきながら、継続してまいり所存です。

さて、公益財団法人日本中国国際教育交流協会は、20年余にわたります期間におきまして、一貫して東アジアの教育交流を重要視してまいりました。そのことは、日本・中国・韓国との間で、教育の充実、そしてすべての子どもたちの健全な発達を願うという観点から、教育関係者が交流しあう重要性を基盤に置き活動をしてまいりました。

今後の東アジアにおける教育交流を標榜しますと、国家間の国境の壁は低くなり人々のつながりは、緊密になっていくと思います。いや、なっていかなければいけないと思います。日本・中国との教育交流をより充実・発展させ、未来を担う子どもたちにグローバルに多文化を習得させるためにも東アジアの国々が関係をより深く交流することが求められます。

繰り返しになりますが、20年前から当協会は、教育関係者との交流、そしてそのことは、人と人が信頼しながら絆を結んでまいりました。国同士で申せば、「互助、共助、互惠」の関係にありたいと願っています。

2014年 9月16日

公益財団法人日本中国国際教育交流協会代表理事  
黒田文男



（記録：伊東良祐・北村智之）

#### ●上海日本人学校訪問記録

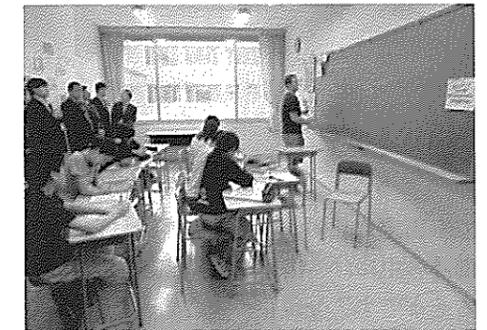
9月16日(月)、上海の浦東にある日本人学校の視察を行いました。上海に入って4日目。久しぶりの日本語の挨拶と外靴を脱いでの校内参観で、団員は少しホッとした様子でした。

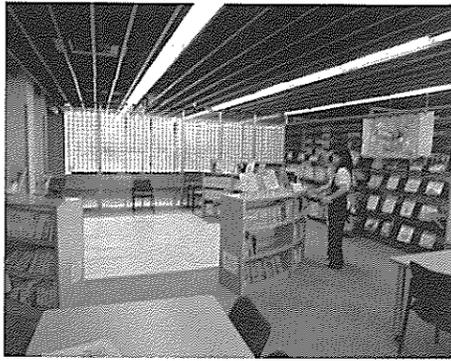
冒頭、黒田団長の挨拶後、上海日本人学校の運営委員長である小暮剛一氏より、



海外及び上海日本人学校の運営について全般的なお話を伺いました。文部科学省の認可を受け、教員の派遣も行われていますが、学校運営については、私学同様の経営基盤の上に成り立つ日本人学校では、リーマンショック等、最近の経済動向と学校経営は無関係ではいられないのが実情のようです。また、児童の在籍期間も、半数は2、3年、4分の1はわずか1年という短期間であることも教育課題の一端をのぞかせていると思われる。全体の運営に関しては、学校周辺の警察と日頃から連絡を取り合い、大きなイベント（体育祭など）のときには、パトロールを強化してもらったり保護者も交えた運営委員会を設置したりして、幅広い角度から安心安全な教育の展開を図っているということでした。さらに、宋慶齡学校とも交流をもち、互いに教育研究をシェアしながら日中友好の第一歩を踏み出したところであり、今後の両校の教育的発展・展開が期待されるものです。

その後、浅木校長の案内で、施設・授業見学を行いました。今回視察した浦東校は、2006年に開校した小学部、中学部と、保護者の強い希望で2011年4月に開校された高等部が、同敷地内にあります。小学校1年生の教室の隣には、高校1年生の教室があるのですが、子どもたちは自然に受け入れ、学校生活を送っているようです。廊下の横幅も広く、全体的にゆったりとスペースがとられた校舎の造りで、それぞれの学級の掲示物も工夫が見られ、見応えのあるものでした。中でもプールは室内の温水プールで、医師と監視員をおいた通年の水泳学習だそうです。恵まれた環境であると思いましたが、医師と監視員は中国政府の取り決めによるもので、常駐させないと水泳学習が行えないとのことでした。日本では、一般教職員が扱えるAEDも、中国では医師資格を持った者でないと使えないそうです。水泳学習の他にも、教育活動を行う上で様々な制約があり、対策を考えざるを得ないこともあるそうです。



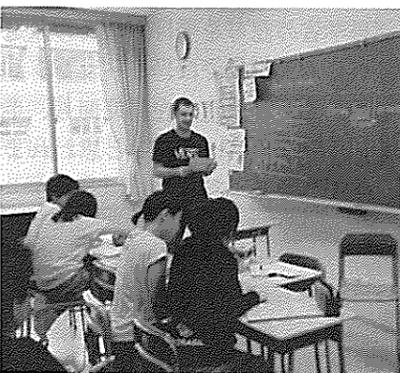
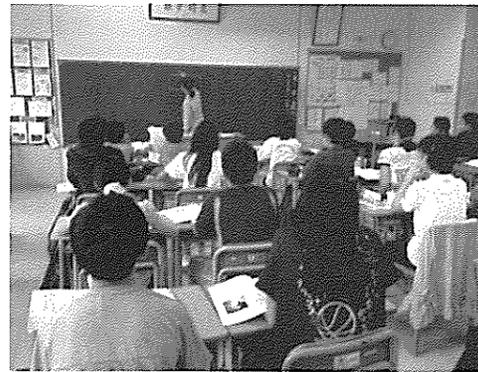


図書館は、廊下側壁面がガラス張りになっており、室内も広く開放感がありました。3万冊の蔵書があり、毎日保護者ボランティアが来校し、学校職員とともに図書室運営をしています。本の選定なども保護者ボランティアの方々が行っているそうです。視察時は、子どもたちが落ち着いた環境で読書や調べ学習を行っていました。日本語と離れた環境にある中で、図書室への保護者の関心は高く、大きな役割を果たしているといえます。

授業参観もさせていただきました。右の写真は、小学校6年生の英語の授業です。クラスを半分に分け、英語と中国語の授業を少人数で行うとのことでした。小学校4年生の体育は、運動会に向けて

学年全体で表現運動をしていました。高校3年生の物理の授業は選択制で、少人数で授業でした。中学校1、3年生の社会や英語も参観しました。どの学部や学年でも教員に質問したり発言したりと、積極的に授業に参加している児童、生徒が多く、活気を感じました。休み時には、小学校1年生の子どもたちが廊下に出てきて、団員に興味津々な様子で話しかけてくれました。昼休みには、ちょうど生徒会選挙の時期らしく、候補者がたすきをかけ、各学級を回っている姿も見られました。

学校に入ってすぐのところに、今までに来校したスポーツ選手から落語家の方など、著名人の写真が飾ってありました。これは、チャレンジタイムといい、保護者の方が運営・企画をし、年1回行われているそうです。写真と一緒に掲示されている内容から充実した交流会の様子が読み取れました。高等部では、協力大学による特別講座があり、日本の大学から教授等が来て講演を行っているそうです。



その他、現地を理解するための時間として「上海タイム」が設けられていたり、全学年で現地校との交流がなされていたりするそうです。また、中国語のスピーチ大会を行うことで、現地校の生徒も日本人学校を訪れ、現地校の生徒は日本語でスピーチし、互いの交流を図るそうです。中学部では部活動も週2回行われていて、日本の伝統文化を継承する部活の他に、太極拳や二胡など中国理解のための部活も推進されています。これらを通して、国際理解教育の推進と日中友好の取組を充実させ、豊かな児童生徒の育成を目指しているそうです。

上海日本人学校は、日本人だけでなく他国の児童生徒も受け入れており、多国籍となっています。また、特別支援級も設置し、そのあり方も研究されていました。歴史認識から現在の日本人学校のあり方については厳しい側面もあるのではないかと推測されましたが、平和教育について

でも固定化せず、多角的な視野にたつて、より普遍的で俯瞰的な教育を心がけられている様子が伺えました。教師陣の中には、広島や長崎出身の方もおられ、数年前には、南京大虐殺記念館への校外学習も実施したことがあるそうです。今現在、過去の戦争について直接取り上げることはしていないようですが、イラク、シリア、ロシア、ウクライナ等の世界情勢を踏まえ、グローバルな視点からの平和教育も実施しているとのことでした。

日本人学校で出会った多くの児童生徒たちは、皆、生き生きと学習に取り組んでいる様子でした。異国の地でなかなか環境に馴染めず、ストレスを抱える子どももいることではありますが、それを補い、丸ごと子どもたちを受け入れ、更にきめ細かい教育を実現されている様子がよく分かりました。廊下の掲示物を拝見しましたが、大人に教え込ま



れた器用だけれど無機質な絵ではなく、どの作品もその子らしさを大切にした生き生きしたもので、先生方の温かい指導観を見て取ることもできました。環境や自然、人権や平和といった多角的な教育が、世界へ羽ばたく人間形成につながり、揺るぎない世界平和への道が築かれることにつながるでしょう。上海日本人学校での小中一貫教育としての場も今後の教育課題に一石を投じていると思われま



(記録：押田彰子・川崎さなえ)

## ●上海市内研修記録 ～孫中山(孫文)と宗慶齡のゆかりの地を訪ねて～

### 【孫中山(孫文)故居記念館】

上海の観光名所で思南路と香山路との交差点にあります。1918年から1924年にかけて、孫文が夫人の宋慶齡とともに過ごした故居です。2階建ての瀟洒な建物の内部は、夫人の記憶に基づいて忠実に再現され、共産党と国民党による『第一次国共合作』を実現させた書齋も開放されています。

孫中山故居の隣は、孫中山博物館になっていて、まず孫文の遺物などを見学します。孫文が生まれてから、香港で医学を学び、日本人梅屋庄吉と知り合い親交を深め、日本に渡り、その後、中国に帰国してから中華民国を建国し、南京で亡くなるまでを紹介しています。

日本で撮影された宋慶齡との結婚写真、日本で使用していた食器も展示されています。彼の鉄道建設計画は、日本の三菱造船工場に見学に行った後、作られたもので、他にも、彼のデザインした中山服や使用していたサーベル、ピストル、中華民国の開国コインなども展示されています。

約100年くらい前の住居でしたが、モダンな構造物と洒落た家具・調度類は、今も健在で、二人の近代的な考えを裏付ける生活様式としての証となるに十分な住居でした。

### 【宋慶齡故居】

宗慶齡(1893～1981)は、映画「宋家の三姉妹」のキャッチにも用いられた「昔、中国に三人の姉妹がいた。ひとりには金を愛し、ひとりには権力を愛し、ひとりには中国を愛した」という言葉で象徴される宋姉妹の次女で「中国を愛した」で表される人物です。

上海中西女塾高中を卒業後、1907年、14歳でアメリカに留学、ジョージア州のウェスレียน大学に留学し文学学士号を取得、1913年に帰国。1914年からは父親が支援していた孫文の英文秘書を務め、孫文とは1915年10月25日に東京で結婚しています。結婚に際しては孫文が26歳年長である点や、前妻の盧慕貞との間に子女をもうけていたことより反対されましたが、妹宋美齡の賛成を受け自宅のあった上海から日本に向かい、孫文の離婚が成立した後に結婚したとされます。

孫文亡き後も中国の為に一生を捧げ中華人民共和国名誉国家主席となりました。「宋氏(家)三姉妹」は上海で生まれ、上海で多くの時間を過ごしたため、その住居などが多く残され、この建物もその一つです。

約100年前にドイツ人海運業者が建てた一戸建ての洋館です。階段や窓枠などのモダンなデザインが印象的で、内部は今でも人が住んでいるかのように家具調度が配置され、生前の生活が偲ばれます。また、手紙や写真、当時使われていたクラシックカー、各国要人からの贈り物なども展示され、彼女の交友関係の広さを表しています。また、広い庭では季節ごとの花が楽しめます。

政府要職にあっても北京での執務以外では故郷の上海に滞在することが多く、政府や外国の要人をもてなすなどの「公邸」の役割を果たしていたそうです。

近くの墓所も宋慶齡陵園として整備されています。

(記録：野村昌宏・小田泰史)

## ●侵華日軍南京大虐殺遭難同胞記念館訪問記録

毎日1万人の来場者。2014年9月14日、中国語だけが飛び交い、入場制限がかかるほどの人混みの中に、正装で身を包んだ第16次訪中団はいました。自然に口元が締まり、誰一人として話をする人はいません。入場待ちの列に並び、各々が、日本人としての責任とここを訪れる中国人の気持ちに思いを馳せていたのではないかと思います。

そんな中、現地ガイドの陳さんの発する日本語に、現地の人はどう反応するのだろうかという過敏になっている自分がありました。予想に反して日本語に対して反応する人は見受けられません。侵華日軍南京大虐殺遭難同胞の展示は、南京に侵入した日本兵の残虐行為であり、衝撃的な内容でした。しかし、資料館の中で「ジャパニーズ」と声を掛けられたときも展示と一緒に観ているときも、強い反日感情を感じることは一度もありませんでした。会館スタッフの方が、わたしたちに分からないよう、遠くからずっと見守ってくれていたことを、後で知りました。反日感情は、あるかもしれませんが、それ以上に、中国人たちは「日本人に、この歴史の事実を見て知って、感じてほしい」という気持ちを反日感情よりも強くもっているのではないかと考えさせられる出来事でした。

展示資料館の壁には、中国語・英語・日本語で「大屠殺遭難同胞」と書かれ、その数とされる「300000」の大きな表示。「30万人」という数字は、いくつかの場所にもありました。展示館に入る手前にあった証言者の足跡の形をとった石畳は、「数多くの証言と証拠によって、この犠牲者数『30万』という数字がある」という中国の強いこだわりを感じました。そのこだわりは、日本では数の問題であり、日本兵の残虐な行為の有無にまで及んでいます。しかし、中国がこの数字にこだわるのは、被害の大きさを訴えるためではなく、この場所が亡くなった方の全てを慰霊するためのお墓であるからということが、この場所に立てば分かります。数を問題にして歴史を否認し、反省を拒否し、侵略戦争を美化するような日本人ではいけないと強く思いました。犠牲になった命の尊厳を守りたいという想いは、被爆国である日本が戦後大切にしてきたことではないのでしょうか。歴史を歪曲し、政治的にそれを利用しようとする動きは言語道断であり、平和の秩序を著しく犯すものです。

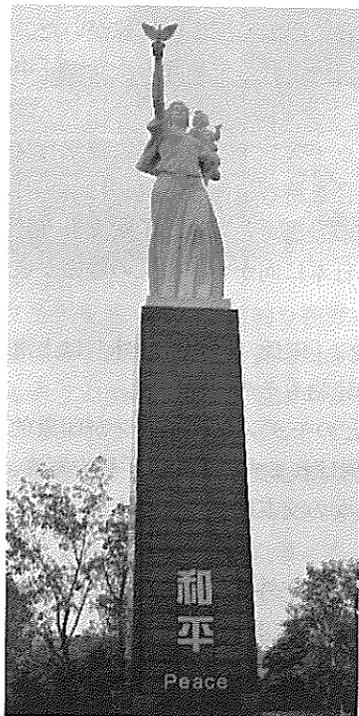
わたしたちは、遭難同胞遺骨陳列室のある展示館の前で、献花し、一列に並び、全員で黙祷を捧げました。このようすを、多くの中国人が静かな目で見つめていたように思います。

展示館内で、一番印象に残っているのは、「殺競」というタイトルで、向井・野田両少佐の誇らしげな写真の横で「百人斬り超記録一向井106人、野田…」の見出しと、日本国民が勝利に舞い上がっている記事が書かれた東京日日新聞の紙面の展示でした。それは、戦争はいかに人間を狂わせてしまうものであったかを示す事実でもあります。

その他に、日本刀で首をはねている写真や切り落とした首を柱の上に置いた写真など、日本軍の虐殺がいかに残酷であったかを証明する写真、その他、壁一面の棚にファイリングされた犠牲者の資料、中国兵と日本兵による証言内容の展示、国際軍事裁判で裁かれた事実とその内容、貴重なフィルムの上映など、克明に記された資料が数多く展示されていました。展示の最後には、「前事不忘、後事之師」とあり、記念館出口のところの塔には、「和平」と刻まれていました。

ここは、日本人を許さず、蔑視するための館ではありませんでした。二度と過ちを繰り返さないために、歴史の事実を忘れずに歴史と向きあうことの大切さを訴えた「平和を希求する記念館」だと思いました。

(記録：喜田健児)



## ●南京市内研修記録

第2日目。この日は研修内容が盛りだくさんであるとともに、上海市から離れた南京市への移動が伴うということで、朝5時40分のホテル出発となりました。

南京市への移動は、2007年から導入が始まった中国鉄路高速いわゆる中国版新幹線でした。第1日目に私たちが中国へ降り立った空港である虹橋空港に併設されている上海虹橋駅からの出発。駅は大変近代的であるとともに、駅の大きさは日本人の想像を超えるスケールでした。日本でいえば空港並みの大きさであり、改めて大陸である中国のスケールの大きさを感じさせられるとともに、日本も新幹線の発達により様々な発展を成し遂げてきたように、この高速鉄道の駅も、今後の中国の発展とともに多くの利用者によって活気ある駅に発展していくのだと思いました。列車自体は大変乗り心地がよく、280キロの距離を最高速度300キロ、2時間を少し切る時間の移動となりました。

南京駅よりバスで移動し、中山陵へ。上海に比べ山が多く、開くと盆地のような地形であるとのことで、上海より少し蒸し暑く感じましたが、曇りで比較的過ごしやすい気候でした。日本人がなじみの深い孫文は、中国では孫中山と一般的に呼ばれるとのことで、目的地に近づくと「中山」という看板が目につくようになりました。ガイドさんの話によると、中国の皇帝や偉人の墓は北京に作られることが一般的であるが、孫中山のお墓である中山陵は孫中山の死後、様々な案が出されたものの、風水の考え方により南京の東に位置する紫金山に作られたとのことでした。(別に孫中山は臨時大総統として執務した南京を気に入り、臨時政府発祥のこの地に埋葬するよう遺言を残したとの説もあります)

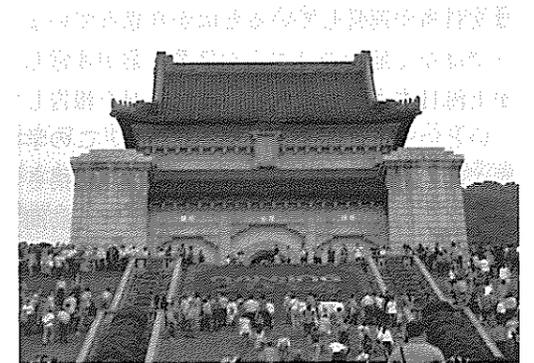
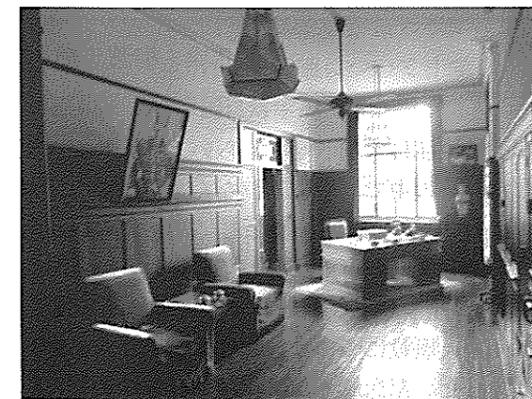
中山陵は広大な敷地であることに驚かされるとともに、この陵を訪れる中国人の多ささらに驚かされました。日本の近代史に名前を残す人のお墓に、これまで多くの人を訪れることはなく、改めて建国の父と呼ばれる孫中山の中国での存在が大きなものであったことを知らされました。

当時の中国の人口3億9千200万人にちなむとされている392段の石段が続く墓道を献花用の大きな花輪を多くの人に注目をされながら交代で運び祭堂へ到着。祭堂(陵門でもある)は白を基調とした壁と濃い青の屋根で統一されており、いわゆる北京にある皇帝の建物とは異なる配色で爽やかな印象を受けました。祭堂には孫中山の唱えた三民主義である民族・民権・民生が刻まれ、堂の中には孫文の石像が彼方に広がる臨時政府発祥の地

ある南京の街並みを眺めるように鎮座しており、この陵墓に来て中国の近代史の始まりをうかがい知ることができました。

午前の最期の視察地である、南京総統府。総統府と金色の文字で書かれた門をくぐると、中は一転、明・清の時代に建てられた建物もあり歴史的な流れを感じるものでした。中華民国臨時政府として国政を担う機関がコンパクトにまとまっており、孫文や蒋介石の執務室や政府機関の部屋などが当時のまま保存されており、この部屋から中国近代史の1ページが始まったのだと想像し、歴史のロマンを感じるものがありました。

(記録：加藤 篤)



## (5) 感想

### 第16次訪中国に参加して

茨城県 吉田 豊

今回の訪中で、私たちは「宋慶齡学校」と「上海日本人学校」を訪問させていただきました。宋慶齡学校は、中国福利会が設立した学校です。この学校の教育的環境はたいへんすばらしく、ここで学ぶ子どもたちは生き生きと活動していました。きれいでゆったりとした校舎、広いグラウンドや体育館、おやつもつくるといふ食堂施設などなど。何もかもすばらしい施設・設備でした。教育にお金をかけることが大事なことだとつくづく思いました。次の日には、「上海日本人学校」も訪問しました。自分の不明を恥じることとなりますが、今まで海外の日本人学校は文科省が運営しているとばかり思っていました。しかし、そうではなく地元の日本人や日系企業が運営しているということでした。話し合いの中で、運営委員長や校長先生が上海日本人学校の厳しい運営状況を報告してくださいました。最大の問題は教員を確保することがたいへん難しいということだそうです。しかし、この学校も施設・設備は充実しているように思いました。子どもたちの笑顔が印象的でした。門に中国旗だけが掲揚されていることが、この学校の置かれている環境の難しさを物語っているように思いました。ふたつの学校を訪問して、どこの国でも、どこの学校でも教育関係者の子どもに対する「思い」は同じであると感じました。

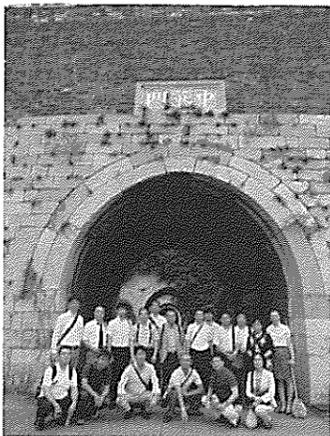
それにしても中国の発展のすさまじさは驚嘆に値するものです。上海の高層ビル街と高速道路、高速鉄道やリアモーターカー、そして新空港などなど。確実に中国は豊かになってきていると感じました。ただ、貧富の格差の問題は、日本と同様今後大きな問題になってくるだろうと危惧されます。

今、日本と中国の国としての関係はぎくしゃくしていますが、そのことが民間レベルや観光などに暗い影を落としているように思いました。日本から中国への観光客も激減しているということです。いろいろな問題はあるにしても隣国同士、大人としての関係を築くことがお互いの利益にかなうはずで、子どもたちの笑顔を見ながら、お互いの立場を尊重し合う友好関係を築くことが重要であると感じました。その意味でもこの日本中国国際教育交流協会の活動の意義がますます増してくるだろうと思います。



### 南京大虐殺記念館で考えたこと

群馬県 梅澤 晋



今回、日中国際教育交流 第16次訪中団に参加させていただき、いくつか大変貴重な経験をさせていただきました。その中で、やはり、なんと言っても印象深かったのは、「南京大虐殺記念館」でした。まず、団として犠牲になられた方々に、献花をし、黙祷を捧げて入館しました。それにしても来館者の多さには驚かされます。また、入館の際の厳重な持ち物チェックにも驚かされました。自然に緊張感が高まります。南京大虐殺については、日本国内で、さまざまな議論があることは認識していました。記念館では犠牲者の数を「30万人」としています。実に広大な資料館の中に、丁寧に、膨大な数の証拠、証言が集められ、かなり論理的にしっかりと組み立てて展示されています。おそらく国際的な尺度でみたとき、日本国内で論じられている「南京大虐殺は虚構である」というのは通らないだろうと思います。虐殺行為を証明するような遺骨の発掘があまりないといった主張については、中国では、「南船北馬」といわれ

るように、南の地方は、大河や大運河が発達しており、虐殺の期間、無数の遺体が水路に浮いていたという証言や証拠写真があんなに多くある以上、遺骨があるかないかということはいずれ問題にならなくなってしまうと思

いました。遺骨が展示してある「万人坑」の説明の中で、多くの「子ども」や「女性」の顎関節が大きく外れていて、おそらく悲鳴が聞きたくないの、無理やり布か何かを押し込んだらしいというのには、本当に胸が痛みました。出口の向こうには「PEACE」の文字とモニュメントがあり、中国語で「恨みを忘れることはできる。しかし、事実を忘れることはできない」とあります。上海の日本人学校にも行かせていただきましたが、校長先生や理事長さんから、両国の緊張が高まったこの間にも、学校に対する嫌がらせは一切なかったとお聞きしました。それを聞いて、子どもたちが登校する前で、平気でヘイトスピーチをしている日本の現状がとても恥ずかしく感じられました。

今回の参加について、背中を押してくださいました神奈川の芹沢委員長と快く送り出してくれた群馬県教組に感謝申し上げます。

### 上海の学校を訪れて

千葉県 伊藤真太郎

今回、訪中団の要請を受けたときとても不安でした。テレビや新聞等の報道を見ていて本当に中国を訪れて大丈夫だろうかと思っていました。不安を抱きつつ、今回の訪中を通して現地にある学校の視察と先生方との交流がとても勉強になりました。

最初に訪れたのは、宋慶齡学校です。

宋慶齡学校はとても立派な校舎でした。食堂やプール、バスケットコート、テニスコートなどどれもスケールが大きい設備があります。また、教職員は世界中から集まり、多様な授業をもたらしています。特に、英語教育には力を入れ、独自のカリキュラムを実施しています。私たちが訪問したときにも、教室には常に英語を話す教師がおり、子どもたちも授業中は英語で学習をしていました。校舎内を案内していただき、視察を終えると宋慶齡学校の先生方との交流会が開かれました。その中で、私たち訪中団からいくつか質問をし、丁寧な回答をしていただきました。先生方の真摯に対応する姿勢を見て、宋慶齡の考えである「来た人を迎え入れるサービス精神」が伝わってきました。

次に上海日本人学校を視察しました。授業中の先生方、児童生徒を見てみると、日本の学校の授業風景と同じであることがわかったと、日本が懐かしく思えました。視察の後、日本人学校の先生方より、学校の説明がありました。校長先生の「児童生徒に、上海がふるさとと感じるような学校にしたい」という言葉から、日本の素晴らしさを子どもたちに伝えたいという強い思いが伝わってきました。また、日本での中国に対する報道について「マイナスな報道が多く、日本での中国に対するイメージが悪くなっている。中国での日本人に対するイメージはあまり悪くないのに」と思いを述べられていました。まさに私が抱えている中国に対するイメージそのものを指摘された気がしました。日本での報道と現実との違いを知り、不安が払拭された瞬間でした。

報告書の冒頭、日中関係のことで今回の訪中が不安だったと述べましたが、今はそう思いません。報道に左右されることなく、やはり自分で訪れて、自分の目で確かめることの大切さを改めて感じました。今は、もう一度中国に行きたいという気持ちで一杯です。黒田団長、赤岡理事、各県の執行部の皆様、そして通訳、添乗員の皆様には本当にお世話になりました。また、このような機会を与えていただいた千葉県教職員組合に感謝申し上げます。



### 第16次訪中国に参加して

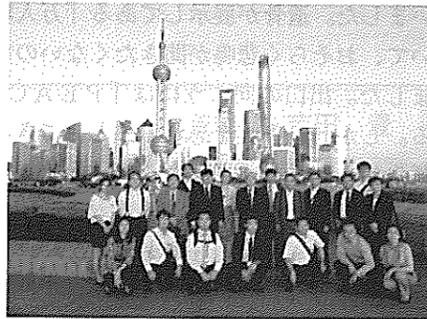
千葉県 中村 博人

私にとって中国を訪れることは、人生で初めての経験でした。社会主義国家である中国の、今の文化や教育について知ることができたのは、今後の私の教育活動にプラスとなる経験となりました。

空港に到着し、バスで移動する中で、今回5日間滞在する上海の街並みを拝見することができました。高層ビルがいくつも立ち並ぶ光景が見られ、中国の急速な成長が感じられる街並みでした。ただ、合間合間に古びた建物も見られ、貧富の格差もあることを感じました。高速道路では、たくさんの自動車が走っていましたが、一般道に降りると、電動自転車（スクーターのようでしたが）が横行していて、庶民の足となっていました。中国というと自転車のイメージでしたが、今は電動自転車が主流であることを知りました。

今回訪中団では、様々な視察を行いました。その中でも、とても印象的だったのが『南京大虐殺館』の見学です。入口にはたいへん多くの人（中国人）が並んでおり、関心が高いことがわかりました。入口までの通路には、大虐殺の悲惨さを訴える彫刻が並んでいて、それを見ているだけでも涙が出そうになりました。建物の中に入り、展示されているものを1つ1つじっくりと見学しました。そこには、確かに日本人がやってきた行為が記録されていました。目を覆いたくなるような写真もありました。一緒になって見学している中国人は、どのような思いでこれを見ているのだろうか。私は胸が締め付けられる思いでした。見学の途中で、協会の方が用意してくださった花輪を献花しました。少しでも今の私の思いが伝わればと思い、黙祷しました。このような機会を与えてくださった協会に、たいへん感謝いたします。日本人としてここを訪れ、黙祷をすることができ、本当に良かったと、心の底から思いました。

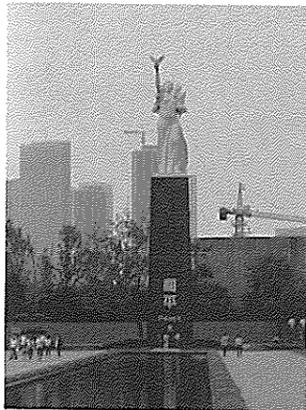
宋慶齡学校と上海日本人学校の訪問、上海市内・南京市内の視察等も、たいへん実りのある経験となりました。今回様々な貴重な体験を、企画運営していただいた『日本中国国際教育交流協会』の皆様感謝するとともに、この体験を、今後の教育活動にたくさん還元していきたいと思えます。



## 歴史から学び、未来への指針とする

東京都 土井 彰

孫文の故居、宗慶齡の故居、魯迅の故居、内山書店跡、魯迅記念館、そして南京総統府など、社会科の教員としてはまさに感激、感無量の行程でした。そして、何と言っても南京大虐殺記念館には、ことばもありませんでした。



残酷な犠牲者のパネル写真は非常に迫力がありました。犠牲者の顔写真と名前が書かれている延々と続くパネルには、ことばもありません。また、大虐殺当時、南京に住んでいた外国人の写真や証言もたくさん展示されていました。見学しながら、いたたまれない気持ちでいっぱいでした。中国の方たちは、飽きることもなく、スマホで写真を撮ったり、長い時間をかけて丁寧に資料を読み込んでいる姿が印象的でした。彼らがどのような感想を抱いたのかはわかりませんが、私は重い気持ちで記念館の外に出ました。犠牲者の数や細かい出来事の信憑性はともかくとして、戦時中に日本がこの地であったことは事実であり、辛くても日本人として真摯に受け止めなければいけないとの思いを強くしました。

最近、「南京大虐殺はなかった」など、歴史を歪曲し、都合よく改ざんしようとする動きが強まっています。しかし、歴史は未来を写す鏡であり、鏡が歪んでいれば未来への指針を誤ることとなります。どんなにそれが辛いことであっても、歴史の真実を曲げてはならないと思いました。そして、それこそが日中の不幸な過去をお互いが乗り越える道だろうとも思えます。

「絶望は虚妄だ、希望がそうであるように！」、孫文による辛亥革命に期待し、裏切られた魯迅は、独立戦争で死んだハンガリーの詩人ペテーフイ・シャンドルのこの言葉を、「希望」という文章で引用しています。ここには「薄っぺらな希望はしりぞけよ。絶望の底から拾ってきた希望こそがほんものだ」という魯迅の信念が語られています。何度も希望を抱いては、かなわず悲嘆にくれた魯迅は、また、絶望の底にあってさえも希望の芽を知っている人でもありました。絶望の底からの希望を語った魯迅は、その代表作である「故郷」においては、「それ（希望）は地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」と結んでいます。

集団的自衛権行使容認が閣議決定され、特定秘密保護法も施行されました。教科書検定基準の改悪、教育委員会制度の改悪、道徳の教科化など、日中の友好を危うくし、平和と民主主義を破壊する政策が急速にすすむ中、ともすればうつむいてしまいがちな私たちですが、絶望の中にあってもなを希望を失わなかった魯迅のように、子ども達の未来に向けて一層頑張っていかなければとの思いを新たにすることが出来た素敵な訪中でした。

## 中国視察旅行を終えて

神奈川県 押田 彰子

人生初のアジア大陸上陸は、上海の虹橋空港でした。「近くて遠い国」と思っていた中国は、私たちを温かく迎え入れてくれました。正直に言うと、湘北教組から業務命令がでたときから内心は不安でした。「空気は大丈夫なのか？」「食べ物は大丈夫なのか？」「治安は？」など、昨今のニュース報道も手伝って、不安や疑問を持つような状態だったかと思います。しかしながら、生き生きとした上海、南京の町の様子をみて、その不安は払拭されました。上海の町のエネルギーがすごいこと！超高層マンションから、五十年以上経っていきそうなアパートまで、大勢の人々がそこで力強く生活していました。町には自転車バイクが溢れ、人々は前へ前へと突き進んでいきます。窓からは沢山の洗濯物が外に干されており、かつての日本に見られたような個人の商店が並ぶ町並みも、どこか懐かしさを感じさせ、味わい深いものがありました。

南京では、孫文のお墓の壮大さと中国の人々の孫文に対する敬愛の情の深さに驚き、また虐殺館では、歴史認識について日本人として深く考えさせられました。悲惨な史実を知ることで、「平和」の二文字が人類にとって如何に大切なことか、改めて心に刻まれた時間でした。また、宋慶齡学校や上海日本人学校の先生方や子どもたちのさわやかな笑顔は、これからの日中友好を支える柱となるだろう、と直感しました。

私にとって、「人生初」の体験の連続でしたが、更にご一緒できた団員の皆様の博学ぶりやお人柄に触れ、またツアーのガイドさんたちや通訳さんのプロフェッショナルな仕事ぶりを間近に見て、己の浅さに気づいたり、また違う目標を立てることにつながりました。

とことん頑張っていること、生き抜くことの意味を、いろいろな場面で考える事ができ、狭い人生観のみで生きてきた自分にとって、大変有意義な旅となりました。

最後の夜に、ホテルのバーでジャズを聴きました。オールド上海そのままのジャズバンドと素敵なボーカルに、うっとりとした夢のような時間を過ごしたことは、貴重な思い出になりました。残りの人生の中で、今回の視察旅行で感じたこと、考えたことは、必ずや指針の一つとなると、今感じています。皆様、お世話になりました。謝謝。

## 自分と違う人と仲良くすること

神奈川県 川崎さなえ

中国に着き、やはり最初に目があったのは、上海の景色でした。日本は、所狭しと建物が建っていると思っていましたが、上海は、その比ではありませんでした。超高層マンションが、それも絶え間なく建っている様は、初めて見た私にとって不思議な光景でした。そのうち、目に飛び込んでくる言葉に意識が向くようになり…視察が終わる頃には中国の長い歴史や人々の生活に興味を惹かれるようになりました。

今回、訪れることができて意義深かったのは、南京大虐殺遭難同胞記念館でした。広い敷地にいくつものブースがあり、そこにいることが憚られるくらい…本当に多くの日本軍の加害写真、中国人の被害写真が展示されていました。しかし、平和に対するモニュメントも多く、憎しみをもってはいけませんが忘れてはいけぬという言葉に救われながら視察しました。私は中学生のとき、歴史の学習のオリエンテーションで、歴史を学ぶ意味は、過去から生き方を学ぶことだと教わりました。過去の過ちに背を向けるのではなく、認め、繰り返さないことが大切なこと。人の心を失ってしまう戦争ではなく、平和的な解決ができる方法を考えられるのが人だと思のです。

現地校である、上海宋慶齡学校では、異学年・異文化交流を重んじ、2歳から17歳まで、20カ国以上の子どもたちが一つの敷地内で一緒に学習しています。「いろいろな文化を知ることを知る」「自分と違う考え方を理解する」「自分と違う考え方を尊重する」ということを大切にしていると、校長先生はおっしゃっていました。上海の日本人学校でも、中国の理解を深めることで自分の国の理解を深める教育をしており、現地を理解するための

時間をしっかり設けておられました。「隣の人と仲良くすることを教えるのが学校である」と、校長先生もおっしゃっていましたが、これらのことは、どの平和教育にも通ずることだと思います。根本に願うことは同じなのです。

今回の視察で、中国の歴史や文化、人々の生活に直接触れることができました。日本では、中国に対するマイナス報道ばかりが目立ってしまっていますが、自分自身の物差しで多角的に物事が見られるようになればと強く感じました。

## 2回目の訪中団

神奈川県 北村 智之

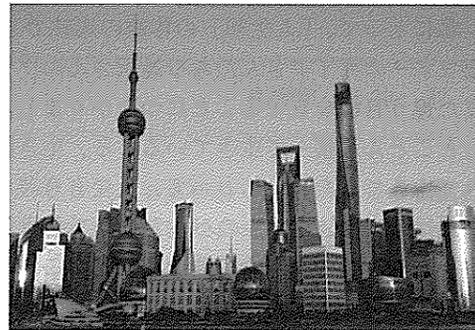
今回、私は、4年前に続いて2回目の訪中団への参加でした。今回の訪中も、前回同様、「教育交流」と「現地視察（観光等）」の両方からさまざまなことを考え、たくさんのことを学びました。

まず「教育交流」では、上海にある宋慶齡小・中学校と上海日本人学校浦東校を訪問しました。どちらの学校も、とても素敵な施設で、教職員も多く配置されていることに驚きました。訪問中、どうしても、4年前に訪問した北京近郊にある易県の小学校と比較していました。同じ中国国内での教育なのに、施設面、人的配置、食事等、あらゆる面での違いを感じながら見学させていただきました。日本では教育格差が問題になりつつありますが、中国におけるそれは、日本以上だと感じた「教育交流」でした。

次に、「現地視察（観光等）」で、印象に残ったのは、南京大虐殺館です。現在の日中の政治関係を考えれば、南京大虐殺館を訪れる日本人は皆無とのこと。館内を見学すれば、過去、日本軍がどれだけ残酷なことを南京の地でしたのかが、痛いほどわかりました。残酷なことをされた中国の方の気持ちを思うと、一つ一つの写真を真正面から見ることはできませんでした。日本人として申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。“忘れることはできないが、許すことはできる。”という言葉が記されているのを見た時は、少しホッとしました。

そして、今回も中国がもつパワーのすごさに驚かされました。発展を続ける上海の超近代的なビル群、バイクだと思っていた電動自転車、リアモーターカー、等々。

最後に、今回の訪中も、日本とは違う文化・習慣に触れることができ、とても貴重な経験をしました。今まで知らなかった中国の一面を感じることができた5日間でした。一緒に参加されたみなさん、楽しい時間を過ごさせていただき、どうもありがとうございました。またいつの日か、みなさんと「カンペイ！」できることを楽しみにしています。



## 民間交流の大切さ

山梨県 梶原 貴

今回の上海視察は、私にとって約15年振りとなる中国で、当時、香港日本人学校に勤務した時、ちょうど香港がイギリスから中国に返還された年でした。「一国二制度」が成り立つのか、世界から注目されていましたが、報道されている政治的な部分と市民の持っている感覚のずれがあると感じていました。ですから、今回の私のテーマは「今の中国の市民感覚を知る」ということで、書物では読み取れない日常生活の中にある市民の考えを知り、そして国際交流の意義を少しでも探るものでした。

最初に感じた市民の感覚は「愛国教育重要基地」に指定された「南京大虐殺記念館」でのことでした。史実の歴史的評価は他に譲るとして、戦争という国家同士の争いが一たび起こると、70年という時間を費やしても、市民の心の中にあるわだかまりを解決することは容易ではないのだと痛感しました。しかし通訳の陳さんとの個人的な会話の中で、「今は国と国との問題があるが、お互いにこれからを大切にしたい。だって私たちはここで笑い合っているじゃないですか。」この言葉を聞いた時、「国家と国家」に出来ない友好関係の構築が、民間交流には出来るのではないかと思います。私たちは常に市民レベルで対話を重ね、市民同士が理解し合うことが、友好関係構築に欠かせないのだと思いました。

一方、今回、宋慶齡記念学校を訪問させていただき、教育という共通言語で私たち教職員同士が、一市民として語り合うところにも大きな意義があると感じました。意見交換から浮かび上がってくるのは、日本でも中国でも、教育の重要性は同じで、教職員というのはどこの国も理想を掲げ、悩みながらもそこにやり甲斐を感じ、子どもたちのために全力を尽くしていることです。言い換えれば、そこは日本人でも中国人でもなく、「教育人」が子どもたちのために懇談し、教育がよりよい方向に進んでいくように、思いを共有することが出来た特別な場所であったと思います。ここでも市民による民間交流の大切さを感じました。

今回の視察のまとめとして、『大地の子』と『ハンナ＝アーレント』（最終日に土居委員長に勧めていただきました）を読み返し、「市民」と「教育」のことを再度考えてみたいと思います。



## 中国雑感

富山県 小田 泰史

組合の専従執行委員として半年足らず。余裕をもって仕事をこなすにはまだまだ。外国の教育事情を知ること、今後の組合活動に何かプラスになると思い参加させていただきました。

訪中が近づくとつれ、訪中経験者から「反日感情が高まっているので、特に南京訪問には気をつけろよ。」など負のアドバイスをいただくなど、政情不安の現在の状況から、緊張感が高まりつつありました。しかも書記局を空けるための下準備等で多忙になり、何ら予備学習もせず、結団式に臨みました。団員のほとんどが経験者ということで、心強い反面、何も知らない自分が務まるのだろうかという不安も募りました。「案ずるより産むが易し」か？まさに開き直りの心境で臨んだ研修でした。

中国では、見るもの聞くもの食べるもの、すべてが初体験。訪問先はもちろん、バスの車窓からも目が離せませんでした。なかでも、近代的な高層ビルとその谷間に密集している古い集合住宅のアンバランスさが印象に残っています。また、勇気を振り絞って散歩したホテル周辺の街の様子や無法地帯のような交通状況。近代的な街に潜む矛盾を感じました。そして、一番印象に残っているのは、街で子どもの姿をほとんど見かけなかったことです。学校の登下校手段は保護者の送迎のみ。それにしても、あまりにも見かけない子どもの姿。これが何を物語っているのか、今回の訪中では答えがでませんでした。

今回は上海宋慶齡学校と上海日本人学校の2校を訪問する機会がありました。どちらも施設設備は申し分なく、子どもたちが校長先生に気軽に声を掛ける様子は、微笑ましい光景でした。機会があったら是非公立の小学校を訪問してみたいという気持ちが高まりました。

予備知識もない無防備な私が、無事日程を終えられたのは、訪中団の事務局の方々の綿密な計画と添乗員やユーマアたっぷりの現地ガイド、そして、同行した団員のみなさんのおかげです。ありがとうございました。

“再見！”この言葉が実現することを祈念して止みません。

## 中国上海で想う「平和への道」

三重県 喜田 健児

上海には、さまざまな表情がありました。世界の人々が訪れる観光スポット「外灘」には、高級ブランド店が入ったイギリスやフランスなどの外国が建築したヨーロッパ風の古代表的な建築物が並び、大都市の一番街を感じさせます。そのすぐ隣で海に浮かんでいるように見える近代的な超高層ビルたちは、近未来をイメージさせてくれます。少し歩いたところには、中国の四千年の歴史を感じさせる木造建築があり過去にタイムスリップします。中心地の近くには部屋数の多い高層マンションが立ち並び、少しはずれたところには屋台や庶民の食事処や映画に出てくるような下町の共同生活のような住居が所狭しと集まり、郊外には広い土地を所有した農家の一軒家が存在します。車道には、外国の高級車が次から次へと連なって走り、日本でいう原付バイクが充電式の電動自転

車となり、車の横を2列3列となりヘルメットなしで走っています。中国料理では、超高級レストランから庶民的な料理店、道端での屋台店まで幅広くあります。教育では、お腹の中に命が宿ったときに入学予約手続きをとるほど人気な宋慶齡学校があれば、教育環境の厳しい学校もあります。

ガイドの陳強さんが、「中国での結婚の条件の一番は、家があること、二番は、車があること、三番が、職業」だと言われました。私の目から見ても社会の中で、貧富の差が歴然としており、貧困から抜け出すことは極めて困難なことであるように感じました。街を歩きながら「ほとんどの庶民は政治に関心はありません。今を生きるために一生懸命に働いています。」という陳さんが言ったことを肌で感じていました。しかし、その心模様までを感じとることはできませんでした。

中国の政治や経済・文化などの歴史や現状を勉強して、この地に立たないことには、中国人的思想や感情というもの理解できないだろうと思います。勉強して正しく知るということは、相手側に立つ視点をもつことであり、相手側に立つということは、相手を尊重することになると思います。故山崎豊子さんは、このことを歴史の真実と共に教えてくれます。「『大地の子』を読んで、たくさんの仲間ともう一度訪れたい。」と中国上海を後にしました。



2度目の訪中国に参加して

愛知県 加藤 篤

幸いなことに今回で2度目の訪中団への参加をさせていただきました。前回は初めての中国への訪問であり、中国が一体どんな国であるのか全く分からず、見るもの聞くもの新鮮でした。しかし、今回の訪中でも、上海のどこかモダンな雰囲気と中国の文化が混ざり合った様子であったり、様子はほとんど報道されない南京の街であったり、また前回の訪問先の学校とは大きく異なる学校への訪問など、今回も充実した視察・交流をさせていただきました。特に印象に残っている2つのことについて記して感想にしたいと思います。

一つ目は南京虐殺記念館への視察です。記念館に到着したときは、一体この記念館に来ている中国の人は、日本人である私たちをどのように見ているのか、また南京虐殺についてどういった感情でここへきているのかなど、率直に不安な気持ちに包まれたことを覚えています。ただ、見学する中で、過去の事実を直視し、二度とこのようなことを起こさないために、平和について深く考えることこそが大切であり、この記念館のある意義である感じ、その気持ちも変化していきました。「許すことはできても、忘れることはできない」といった言葉や、展示室を出たときの「和平」と記された塔など、平和について深く考えさせられるとともに、この記念館に多くの日本人が訪れる日が来ることを願った視察でもありました。

二つ目は宋慶齡学校での教育交流です。前回の学校訪問はいわゆる田舎の学校であり、40人を超える狭い教室に古い机・椅子、そして決してきれいとは言えない身なりの子がほとんどの学校であり、今回の宋慶齡学校は、そのすべての面で正反対な学校でした。同じ中国でありながら、ここまで異なった教育環境があることに驚くとともに、中国の格差社会の一端も感じました。ただ、子どもたちの学ぶ意欲や先生方の教育に対する思いは同じであり、教育の本質は変わらないことも感じることができました。

他にも多くのことを体験的に学ぶことができました。教育に関係する者として大きな財産をいただきました。残念ながら良好とは言えない日中関係の中で、未来への懸け橋である教育を中心とした草の根的な交流を続けていくことの意義の大きさを今回の訪中でも感じました。ありがとうございました。



中国宋慶齡基金会との共同プロジェクト第6回易県音楽教師養成研修（音楽教師培訓）が、中国河北省易県で、8月21日から3日間にわたって行われました。研修は、3名の講師を招き、易県各地の小中学校より120名もの教師が参加して行われました。今年度支援費の中から購入した笛も参加者全員に用意され、養成研修の一つとして大いに役立ちました。3日間の研修は、声楽の基礎、発声、笛演奏、研修内容は、合唱・器楽の指導方法といった児童生徒への授業ですすぐに取り組めるより実践的・具体的なものでした。音楽教師養成というプロジェクトの目的にそった研修で大いに成果を上げることができたと思います。



【易県からの概要報告】

1. プロジェクト実施状況

2014年8月21日から23日の間、中国宋慶齡基金会と日本中国国際教育交流協会は河北省易県で第六回音楽教師研修コースを催しました。易県各小中学校の音楽教師が研修会に参加しました。音楽教師たちは研修の機会を大切にし、真面目に授業を受け、メモを取り、進んで質問して大いに成果を上げました。

(1) アンケート調査を実施し、実際の状況を把握して効果を上げる。

研修会の前、河北省易県教育局教科書責任者はあらかじめ全県の音楽教師に、アンケート調査を行い、教師と積極的に交流して、日常教学中の問題点と需要に応じて研修内容を設定して、普及性と応用性のある、効果的な研修会を行いました。3日間の集中研修の間、出勤記録をちゃんと実行して、研修の質を保障するためにも、教師たちには研修中の組織規律をしっかり守ってもらいました。

(2) 目標を明確に、重点を集中し、内容を豊かにする。

研修目標は音楽教師の専門技能を育て、音楽教学中の具体問題を解決することです。音楽教学を担当して、学生の芸術実践活動を展開することが指導できるように、音楽教師には基礎的な音楽知識を身につけてもらいました。課程としては、音楽教師の専門発展、教学のレベルアップ、学生の興味育成、学校内の芸術活動の展開をめぐって設けられました。その中に、まずは声楽教学の課程がありました。二は講堂教学設計の課程です。新しい音楽教学基準や、音楽課程改革理念や、教育方法と手段などの内容です。三は指揮学の課程です。理論解説や、指揮模範、現場練習などが含まれています。四は現場交流の課程です。音楽教師が研修してから、成果を教学の中で生かして、交流授業をすることです。五は研修と報告の授業です。その中で勉強しながらまとめて報告する方法で、研修の成果を強めました。

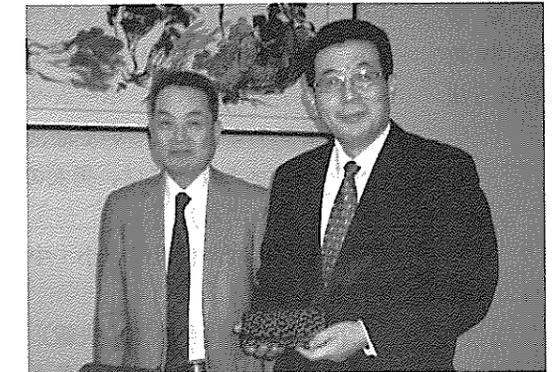
2. 養成研修内容

月 日	研修内容	講 師	備 考
8月21日	合唱指導	骆岭	河北師範大学准教授・大学院の講師であるとともに国立研究所・河北省音楽者協会のメンバーでもある骆岭先生が、合唱の指導法について講習してくれました。
22日	民族声楽歌唱方法指導	许晓静	河北師範大学民族学院教授として、長年にわたって民族的・伝統的発声学にもとづく指導の研究を行っている许晓静先生が、民族声楽の講習を行ってくれました。
23日	笛演奏指導	张山林	河北師範大学（笛専攻）の出身で、易県の音楽・実験的な音楽グループのリーダーとして活躍している张山林先生が、笛演奏指導について講習してくれました。

各団体から歓迎を！今後のプロジェクト等について意見交換と確認も

2014年3月23～25日、黒田文男代表理事・山中正和業務執行理事・赤岡直人理事の3名は、中国宋慶齡基金會を訪問し、今後の教育支援プロジェクトの方向等について話し合いを持ちました。また、中国教科文衛體工會全國委員會も訪問し、今後の両者の協力関係について意見交換を行いました。

（会談内容等につきましては、資料【共生力20号】をご覧ください。） 41ページ参照



3. 特徴鮮明、成果顕著、時代に応じる研修

易県教育局は今年、楽器が講堂に入ること進めています。楽器を利用して、学生の個性発展を促進し、音楽の実践参加に興味を持たせ、審美能力を高め、創造性思想を發展させます。今回の研修は特に笛の演奏課程を作り、120名の音楽教師に教えました。音楽教学組織者と指揮者の役割を發揮させ、笛の演奏を日常の教学の中で展開させ、学生には積極的に音楽実践に参加させて、楽しく勉強しながら成長できるようにしています。

今回の研修内容は非常に豊富で、講師は十分準備していました。音楽教師は理論の知識と専門技能だけでなく、課程設置と教学方法も勉強しました。歌唱、指揮と楽器演奏の指導を受けて、音楽先生個人的な専門素質も上がりました。全然分からないレベルから段々わかるようになった教師もいるし、「少しできる」から「身につける」になり、総合的にレベルアップできました。教師は自ら全面的な發達で、しっかりと音楽教学の質を高め、沢山の子供に正式な音楽教育を受けさせ、音楽に対する夢と興味を起こさせることになるでしょう。

短い研修ですが、その後は考察して、指導してサービスするなどの仕事を引き続いておこなわなければなりません。また研修教師がお互いに知識と技能を交流できる場を作り、勉強したことを通して自分の教学の問題を解決し、学習の成果をもっと強めるようにしたいです。音楽教師はこれからも日本の音楽の先生と交流して、教育面で合作し、教学検討と相互訪問を通してお互いに勉強を促進してともに發展できたらいいと、期待しています。



4. 資金の使用状況

日本中国国際教育交流協会より易県音楽教師養成研修に寄付された100万円（60,249元に相当）については、以下のように具体的に実用的に支出されました。

プロジェクト名	日本中国国際教育交流協会教育支援プロジェクト	担当責任者	周 露
担当部門	中国宋慶齡基金會基金部	実施時間	2014年8月21～23日
プロジェクト概要	中国河北省易県での音楽教師養成研修支援		
経費支出の明細			
経費	決算額	内 容	
1 教師の食費・宿泊費	24000.00	200元/人×120人	
2 養成研修資料印刷費	3600.00	30元/部×120部	
3 養成研修講師費用	8000.00	河北省師範大講師2名、3000元/人 易県講師1名、2000元/人	
4 笛購入費	19200.00	160元/本×120本	
5 会場設置及び整備清掃費用	1400.00	20元/m <sup>2</sup> ×30m <sup>2</sup> 夏期休暇中の清掃職員確保の為に800元	
6 記念写真費	3600.00	30元/人×120人	
7 基金会職員出張旅費	796.00		
合計	60596.00		

## ■ 第3回教育交流ホームステイ in 山梨 (教育交流・研究等助成事業)

### (1) 実施要項

1. 実施目的 中国人留学生の日本語学習の一助として、日本家庭でのホームステイを体験し、ホストとの交流を通して日本語の語学力を磨き、日本人及び日本文化に対する理解を深め、日中両国の友好の礎を担う人材を育成すること
2. 実施期日 2014年8月8日(金)～10日(日) 2泊3日
3. 実施場所 山梨県下の家庭
4. 対象者 中国からの留学生 (大学入学のための語学研修生)
5. 募集数 7人 (ホストファミリー7家庭)
6. 募集方法
  - ・留学生7名の選考は、ホームページ等で広く募集し、応募者の中から事務局で行う。
  - ・ホストファミリーについては、山梨県の教職員関係団体の協力を得ながら選定を行う。
  - ・ホストファミリーには、男女の希望等要望を聞きながらすすめる。(学生の選考と連絡を取り合い調整する)
  - ・できるだけ同年代近く(小・中・高・大)の子どもがいるホストファミリーを募る。
7. 日程
  - 8月8日(金)
    - 新宿：集合→山梨へ(中央線) 甲府駅：ホストファミリーと合流(待合スペースで自己紹介等簡単なセレモニーを)→各ホストファミリーごとに活動にうつる
  - 8月9日(土)
    - 各ホストファミリーごとの取り組み
  - 8月10日(日)
    - 午前中は全体で山梨の子どもたちとの交流→午後：各ホストファミリーごとで昼食後、全体で交流会→ホストファミリーとのお別れ会→甲府駅から→新宿：解散

### (2) 日程(例)

	時刻	行 動 と 内 容
8日	10:37	J R 甲府駅改札口にて受入(新宿発9:00あずさ9号)
	11:00	甲府駅発(自己紹介を含め、喫茶店などで簡単にあいさつ)
	11:30	豊富道の駅で昼食(～12:30)
	13:00	下部金山博物館で砂金採り体験(～14:00)
	14:30	身延山散策(参詣階段+本堂等)(～16:00)
	16:30	買い物
	17:00	自宅にてそば打ち体験
	19:00	夕食(手打ちそば、天ぷら、たけのこご飯)
	7:00	朝食
	8:00	自宅発→時間によっては、ホストファミリーの勤務校へ
	9:00	静岡県 水族館または久能山東照宮へ
	11:00	由比東海道広重美術館 及び 御幸亭(和風庭園 茶室見学)

9日	12:30	昼食 桜えび料理
	14:00	富士宮浅間大社参詣
	15:00	花乃湯にて温泉
	17:30	夕食準備
	19:00	夕食(手巻きずし)
10日	7:00	朝食
	8:00	自宅発
	10:00	笛吹市スコレーパリオで篠笛教室の子どもたちと交流
	12:20	桔梗屋 本社工場見学(12:40～) および食事
	14:30	教育会館
	16:00	見送り

### (3) ホストファミリー・留学生名簿

	ホスト氏名	所 属 所 (学校等)	学生氏名	読 み	男女	年齢
1	中村 直人	甲州市立井尻小学校教諭	朱 子源	zhu ziyuan	男	19
2	山下 俊	笛吹市立石和南小学校教諭	任 媛媛	ren yuanyuan	女	18
3	成瀬 貴弘	南部町立陸合小学校教諭	白 瑞	bai rui	女	23
4	八巻 一貴	南アルプス市立若草小学校教諭	鐘 英姿	zhang yuxing	女	24
5	篠原 進	北杜市明野小学校校長	羅 皓予	luo haoyu	男	19
6	佐藤 尚武	富士吉田市立吉田小学校教諭	吴 倩	wu qian	女	17
7	小笠原和子	退職者(元大月市立猿橋中学校校長)	章 宇星	zhong yingzi	男	25

### (4) ホストファミリーからの報告

#### 1. よかった点など

- A・台風のため、予定の計画より若干変更したが、世界遺産の富士山は日本が誇るシンボルであることを実感した。あまりに身近にありすぎてその存在が当たり前だったが「その良さ」に留学生の言葉などから気づくことができた。受け入れをして、あたためて「世界遺産の富士山を後生に引き継ぐ」ために、何をしていくべきかを考える機会を与えてくれた。
- ・あまり形式にとらわれずに、料理をしたり、家の風呂に入ったり、花火をみたり(夏休み)テレビをみて、雑談したり、一緒にバドミントンをしたり、またいろいろな施設を見学するなど、日常生活を通して、少なからず学生さんは私たちが意図することを学んでくれたのではないかと考える。また、同時に私たち(子どもも含めて)も学生から文化の違いや日本の良さを学ぶことがで



きた。

- B・昇仙峡や富士山5合目など、普段身近にありすぎてなかなか行くことがなかった場所を留学生と見学する中で、私たち自身も山梨の良さに改めて気がつくことができた。
- 夏休みとはいえ、子どもたちも部活等でなかなか予定が合わなくなってしまっていたが、今回のホームステイによって久しぶりに家族そろって色々な体験をすることができた。
  - 「刺身が苦手」ということで、当初予定していた「手巻き寿司」はできなかったが、「天ぷら」「野菜ご飯」などの家庭料理と一緒に作ることができた。また、「ほうとう」を食べるために「小作」に行ったが、とても喜んでくれた。(普段外でほうとうを食べることはないので家族も喜んでいました)
  - 中国の文化や食生活、習慣など色々な話を聞くことができ、私たちもこのホームステイを通して勉強することが多かった。
- C・来日してから4か月余り、会話には支障を来すことはなかったが、表情は硬く、物事を沈着冷静に観察しているというのが第一印象だった。
- 「〇〇さんは、中国人のことをどう思っていますか？」出会って間もなく直球が飛んできた。大学時代に中国史を専攻していたことや2回中国を訪問していることなどから、「好印象をもっていて大切な友人だと思っている。」と答えた。
  - 3日間生活を共にする間に、過去のこと、母国中国のことなどをいろいろと語ってくれた。
  - 「大丈夫です。」が口癖で、飲み物を勧めたり一緒に食事を作ることを勧めたりしても必ずその言葉が返ってきた。2日目に「そば打ち」を体験したが、その時はエプロンを着けて、「粉回し」や「のし」の作業をしていた。3日目に「写真をメールで送ってください。」と初めて要求を耳にしたとき、妙に嬉しかった。
  - 夕食後には、百人一首の「坊主めくり」やオセロをして和やかな雰囲気になった。「坊主めくり」は、「これは確率のゲームですね。」と、ここでもクレバーな一面を見せていたが、ゲームの終盤で坊主がでたときには、笑顔を浮かべていた。
  - 2日目は、観光地を巡るハードな日程だったが、「疲れていませんか？」と逆に気遣いを見せてくれた。何かをしてあげると必ず「ありがとうございます。」と丁寧な言葉で返してくれた。
  - 日本に来てから3食コンビニの弁当という生活が続いているようである。3日間のホームステイで体験したことがマンションと学校とコンビニを往復する生活を変えることを願っている。

## 2. 学生について

- A・礼儀正しく、布団をしっかりたたんだり、身の回りのことが普通にできる学生さんでした。
- 日本語を話すのがままならないようでしたが、私たちに話そうと一生懸命で、将来めざす職業、将来したい仕事について、しっかりした考えを持って、語ってくれました。その考えに感銘を受けました。
- B・初めは緊張していたが、できるだけ早く慣れようと努力している様子がうかがえた。言葉遣いを含め、見学先や家での生活態度はとても礼儀正しくきちんとしていた。
- 日本語の聞き取りについてはほぼ問題なかったが、時折返答に困る場面も見られた。しかし、その際もスマートフォンで翻訳したり筆談するなどして、こちらの質問にも日本語で一つ一つ丁寧に答えてくれた。
  - 話をする中で、日本の環境や文化に対する好意的な感情を持っていると感じた。また、日本と中国の違いなどについてきちんと自分の見解を持っていて、18歳にしてはしっかりしていると感じた。
  - 普段の家庭生活を体験して欲しいと思い色々なことを手伝ってもらったが、気持ちよく働いてくれたのでこちらもとても助かった。
- C・自分の置かれている状況を冷静に理解していて、日本の大学に入り物理を学びたい、そのためには寝る間を惜しんでも勉強をするという強い意志が感じられた。
- 日本について好印象をもっていた。日常単語や日本の文化等についても興味があり、気になることはその都度質問していた。
  - 大勢のライバルに勝ち抜くためには、人よりも勉強し努力することが大切だという考えを強くもっていた。
  - 自分に自信をもち、失敗や他人の評価を恐れずに物事に挑戦することで、彼の人生は拓かれると感じた。18歳という若さで故郷を離れ日本で学ぶことを選択した彼の今後に大いに期待したい。また、近い将来、日中

の友好の架け橋となってくれることを強く願っている。

- D・とても真面目で、礼儀正しく、好感のもてるしっかりとした青年であった。日本語や日本の生活の様子を習得しようと、何事にも意欲的であり、主人である和尚さんとの会話や寺について興味を示していた。どこにいても、私のことを「〇〇先生」と呼び、とても優しく気づかってくれた。
- 朝6時に起き、座禅や作務にも二日間意欲的に取り組み、他の人とはちがった貴重な体験が出来たと話していた。
  - 東京に帰って早速お手紙をいただき、その中に「もしかしてある日、僕も和尚になるかもしれません」書いてあったのはびっくりした。
  - お手紙を交換しながら、日本語の表現のむずかしさなど勉強しようと約束した。
- E・〇さんは中国の法律を学び、文化・歴史・政治についても幅広い知識をもち、礼儀正しい方であった。現在の中国の様子についても冷静な判断ができ、互いの歴史についても認め合いながら話が出来た。
- 日本語もとても上手で、日常会話でほとんど困ることなく話が出来た。本人は、話がとても好きで、時折自分の話したいと思うように伝えられず、悔しそうな表情を見せるほど、向学心のある学生であった。
  - 多民族国家である中国人の一人として、自分の出身である漢民族に誇りをもち、中国の他の民族や各地方の特色についてもよく理解しており、〇さんとの話から、中国に関わるたくさんの情報を得ることができた。一人っ子政策により、人口が抑制され、今は日本と同じ少子高齢化社会をむかえ、将来が不安であることや、急速な経済発展により起こっている諸問題に目を向けながら、自分は家族制度や子どもたちを巡る法律制度に携わっていきたく自分の目指すべきものをもった素晴らしい方であった。
- F・とても礼儀正しく、素直な好青年だった。話す人、話の内容によって、言葉を選び、わかりやすく伝えようとしていたのが印象的だった。
- 裏表無く、自然に話をしていて、こちらも、思ったことを飾らずに普段通りに話すことができた。



- 高校生の息子が、連絡先になっており、今後も時折連絡を取るようにしたい。たまに息子のメールに家族からの言葉を一緒に送っている。
- G・いつでも笑顔で、日本人の文化をなんでも受け入れようとする姿勢で生活をしていて、食事が出されたものは、なんでも「おいしい」といって食べていた。
- 子ども達に優しく接してくれた。はじめは子ども達もぎこちない感じであったが、だんだんと心のつながりができて、笑顔で交流することができた。よく面倒を見てくれた。
  - 学んで半年くらいしか経っていないのに、日常会話レベルではしっかり話をすることができた。わからない言葉は聞

いたり、自分で調べたりして、何とか伝えようと努力していた。

- 謙虚な姿勢でよかったのだが、できれば、自分からやってみたくことを主張してもらったら、より満足がいく活動やアドバイスができたとも思う。

## 3. 今後への希望、改善してほしい点など

- A・「まなびの広場ふえふき」はとても良い企画でしたが、12:00~14:30までの日程調整が難しく、できれば午後からの開催に設定にした方がよいと思いました。(遠方のため家に帰ることができなく、甲府で過ごしていました。過ごすには時間が短すぎます)
- B・3日目については、スコレーで交流会後再び合流するまでに時間があつた。甲府周辺のホストファミリーにとっては、最終日にも自由に時間が使えるという点ではよいが、甲府周辺でないホストファミリーは悩んだかもしれない。みんなで一緒に何かをするという体験はとてもよいと思うので、思い切って3日目は全員で体験をしたり、食事をしたりするなどしてもよいと思った。
- C・〇君は、中国人の8割以上が日本に親しみを感じていると話していた。日中国際教育交流協会の地道な活動が日中間の関係改善につながることを期待している。
- ホームステイを受け入れたのは初めてであるが、例えば3日間でも人の命を預かるという重みは感じた。そば

アレルギーはないか、最終的には本人にそばを見せて確認した。また、交通事故や災害など不慮の事故に巻き込まれることも考えると、さらに不安のない保険に加入していただきたい。

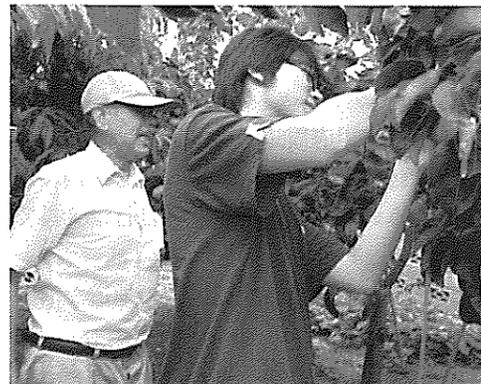
- D・三日目のホームステイまとめの会での交流はとても良かった。他の留学生のことや、ホームステイの様子がわかり参考になった。
  - ・台風の影響がとても心配でしたが、理事の判断よろしく、全日程が無事終了し、ほっとした。
- E・事前のプロフィールをいただいたが、もう少し情報がほしいところもあった。今回は家族での交流ということもあり、娘(中1)、息子(小4)と留学生23歳という年の差があったので、何を接点に話をしてよいか戸惑ったが、「アニメ」という共通の話題があり、ほっとした。事前にこうした情報(ホストの子どもたちとどのような話をしたり、関わったりしたいか)もあれば、迎える側も気持ちや不安も違うのではないかと感じた。
  - ・3日目にやった互いの名前や出身地などの基本的な情報交換を1日目に設けてもよかったのではないかと感じた。
  - ・3日目は午前中の全体交流会があり、自宅も遠いため出発が慌ただしくなってしまった。最後の朝、もう少し落ち着いて過ごしたかった。全体交流会が午後からでもよいのではないかと感じた。
  - ・3日目の移動が何回もあり、時間ももったいない気がした。できれば、移動回数をできるだけ減らしてほしい。また、一度午前中に石和に集合し、その後解散したため、昼食場所などお店などもよく分からずに苦労した。
- F・小さな一歩かもしれないが、日本と中国が互いに理解し合えるきっかけになるように、活動が益々活発になるといいと思う。
- G・事前に学生さんのホームステイにおける志向や希望等を聞いておけば、もっとプランが立てやすいと思いました。たとえば、いくつか選択肢を用意して、(□日本文化について、深く知りたい。□日本の料理に興味がある。□観光がしたい。など)優先順位をつけてもらうようなアンケートが取れたら、準備する側もある程度方向性もてるように思います。話すことも大切なのですが、完全な意思疎通というところまではできなかったため、ある程度思いを知っておくことは大切だと思いました。
  - ・可能なら、3日目でなく、初日に体験・交流活動があると、よかったようにも思います。学生さんの思いを聞けたり、言葉のレベルも感じられたり、メリットもあるように思います。



## (5) 学生報告

### 聡明な人が書いた美しい詩歌

朱 子源



「まもなく、甲府駅…」アナウンサーのいい声で目覚めた。やばい、すごく緊張してきた。どんなホストファミリーか?会ったら、何を言えばいいか?いろいろ心配した。もともと心を落つちかせるために仮眠をとったが、あまり効用はなかった。電車を降りて、駅で初めて中村さんの家族を見た。中村さんの奥さんの悦美さんだけではなく、スマートなお子さんの聡太君と可愛らしいお嬢さんの詩乃ちゃんも迎えに来てくれた。誰もがみんな笑顔で私とあいさつをした。とても感動して、緊張感もすっかり消えてしまった。

「腹減った?一緒に昼食を食べに行こう。」悦美さんがアドバイ

スをして、車でずいぶん豪華な和食レストランに連れて行ってくれた。途中で、車の窓から映った映像を通じて山梨県に対しての好感度がどんどん上がった。道沿いの建物が多くなかったが、整然と並んでいた。高いビルがあまり見えなかったのも、遠いところまでよく眺めることができた。まわりにはうねりながら長く続く山並みがあった。来たとき天気がくもっていたから、灰色の群雲が山並みの上に低く垂れ込めており、なんだか不思議な神秘感と神聖な雰囲気を感じた。少し前は果てなき、緑一色に包まれた広い田畑であった。自然に相当近い場所で、爽やかな気持ちになってきた。窓を少々下げて、風を入れた。草花の匂いが混じっていた。酔ってしまった。「かなり綺麗で、住みやすい」という感慨を禁じ得なくて、「あたかも美しい詩歌のような町だ」と感嘆した。

レストランに着いて、靴を抜いで、席を探して、メニューを見た。「遠慮しないで、何でもいいですよ。」注文が済んだ後、美味しい和食の料理を味わいながら、コミュニケーションをしていた。出身地はどこから日本の生活はどうかまで、たくさん話した。私の日本語があまり上手ではないというのを考えて、遅いスピードで話して、わからない語彙や言葉があったとき、いつも根気よく説明してくれた。私の日本語らしくない日本語も真剣に聞いて、そして理解してくれた。とても親切にしてくれて、ありがたかった。

食事が終わったら、すぐ中村家の住まいにいった。桃と葡萄の田の中に位置している立派な家であった。健康診断で私を迎えに行けなかったというご主人の中村さんは、既に早めに家の入口で待っていた。心が温かくなってきた。

最初に行った観光地は鳴沢氷穴だった。不思議な天然氷でできた長いトンネルとして、大勢な観光客を引きつけていた。私も驚いた。次に富士山博物館へ行った。そこで、いろいろな富士山についての知識を習った。この期間、聡太君はずっと付き合っ、難しい言葉を簡単な文に直して説明してくれた。また、たくさん博物館には記載されていない知識も教えてくれた。聡太君の博学にすごく感心した。



悦美さんの手作りの美味しい晩御飯を食べた後、一緒に花火大会を見に行った。浴衣を着ていなくても、その嬉しさは変わらなかった。極めて綺麗な花火が心に刻まれた。

家に帰ったのは9時ぐらいだった。お風呂に入ってみると、気持ち良すぎたから、入ったきりでも構わないなと思った。そして、部屋に戻り、布団を敷き、柔らかい布団なので、すぐに眠った。

翌日の7時に起きた。中村さんの実家へ桃を取りに行った。そこで中村さんの両親と会った。とても元気なお年寄りたちだった。おばあさんは私を桃の畑に連れて行って、桃の植え方やどんな動物が桃を好きかいろいろ教えてくれた。それに、一緒に桃を取って、とても面白い活動だった。それから、有名な観光地の昇仙峡を馬車で見物した。蟬の声がこだました

山に、猿のような岩や愛をかける橋などの神技をのびのび観賞して、楽しかった。その後、影絵の森美術館の絵と山梨県立博物館の妖怪画を鑑賞に行った。日本の現代アートにしても、古代の絵にしても、想像力も一杯あったし、腕もうまかったし、それで、感心した。

黄昏、中村さんが勤めている小学校のお盆踊り大会に参加した。揃った小学生たちが祭りの服を着て、精一杯踊る姿を見て、その勢いに恐れ入った。彼らの身から日本人の心がひとつになっている精神がはっきり表れていた。そこでも、中村先生の人気を深く感じた。普通の先生の想像と違って、児童たちは怖そうではなくて、愉快地、それぞれ思い思いに日頃から尊敬している中村先生に挨拶をした。このような理想的な先生と児童たちの関係は、いい先生しかできないと思った。

3日目の時、笛吹市の小学生たちの笛演奏会に出席した。外国からきた友人のために、心を込めて長い時間練習したと思われる素晴らしい演奏をしてくれ、とても感激した。それから、先生方のもとで、笛の吹き方と色紙を使って折り紙の勉強をした。いろんな技術が身につけて、楽しかった。

それから、ホームステイの交流会にいった。3日間のいろいろな体験や感想をみんなで分かち合った。私は、中村家族に感謝を言うのはもちろん、日中国際教育交流協会に、フジ国際語学院にも感謝を言いたかった。こんな日本語の学力を磨き、日本の文化に深く触れる機会を作ってくれて、誠にありがたかった。

別れはどうしても避けられなかった。ちょっと悲しかったが、これからの交流も続けていけると考えて、少し

ずつ落ち着いた気分になってきた。

東京都はしつこくて、紙幅を大幅にさいて長々と述べている文章であるなら、山梨県は詩歌である。しかし、絶対に愚かな人が書いた詩歌でなく、例えば不毛の土を開発して、町を造ること。決して聡明な人が書いた劣る作品でもなく、例えば自然が豊かな土地に工場がいっぱいある。わずかの字数で深遠の境地を描いて、読者に余裕な想像空間を残してくれる。それは山梨県、聡明な人書いた美しい詩歌である。

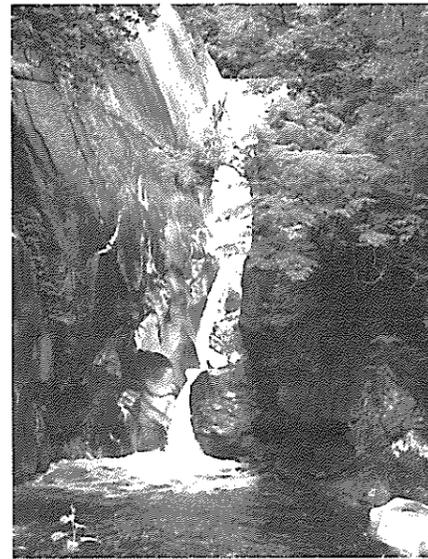
## 綺麗な山梨県

任 媛媛

8月8日、待ちに待ったホームステイがいよいよ始まりました。この日はみんな早く起きました。そしていっしょに新宿駅に行きました。新宿駅に着いたあと、みんないっしょに山梨への旅に踏み出しました。途中、私は初めてのホームステイでテンションが高まり、緊張していました。それに「私が滞在するホストファミリーはどんな家庭だろうか…」と考えたりしていたら、知らないうちに時間が過ぎてしまいました。駅を出たとたん、私の心がドキドキしました。山下俊さんご夫妻と翼さんはとても優しいひとたちでした。その時に、三日間のホームステイが始まる感じがしました。

最初、山下俊さんご夫妻と翼さんは私を連れて甲府の観光名所である昇仙峡へ行きました。途中で、お互いに自己紹介をしました。そして、昇仙峡のロープウェイに乗りました。また甲府の水晶と石を見ました。土砂と石の水を含んでいる石を探しました。そして流しうどんを食べました。とても楽しかったです。今回のホームステイはきっと私の人生の中の貴重な記憶になると思います。

今回のホームステイは本当に面白かったです。私はいろいろな物事を体験しました。一日目の夜、私が最も印象に残ったのは、天麩羅の作り方を学んだことです。天麩羅を作るために必要な材料はカボチャ、ジャガイモ、なすなどです。それらの天麩羅はおいしかったです。こんな機会をいただき、ありがとうございました。山下さんの奥さんの指導で、私は天麩羅を作ることができました。その夜、私たちはきれいな花火を見ました。中国では平日に花火を打ち上げることはなく、特に重要な祝日に花火を見ることがあります。

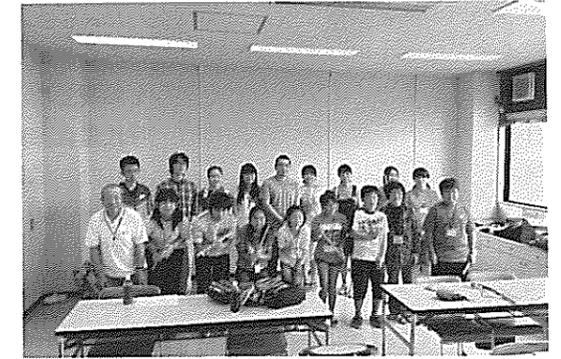


二日目、私は自転車試合を見ました。また、山下さんご夫妻とひかるさんとつばささんと一緒に富士山へ行きました。富士山の周りにはたくさん山がありました。曇りでしたが、自然の風味がありました。しかも空気がきれいで、環境がとてもよかったです。まさに人間仙境です。私は富士山の景色の美しさに感動しました。山下さんと奥さんに、富士山のお土産をいただきました。その後、富士山の神社へ行きました。私は神社で正しい拝法を学びました。また、富士山の水を飲んだり持ち帰りました。家に帰ったあとで山下さん家族とBBQをしました。本当にとっても興奮してしまいました。これは私が初めて家庭でしたBBQでした。BBQはとても美味しかったです。

夕方はみなさんと一緒に温泉に行きました。その温泉は室内と室外がありました。私は初めて温泉に入浴し、とても興奮しました。さらに室外温泉に入浴することで全部甲府の景色を見ることができました。特に夕方になると、甲府の夜景は非常に素晴らしかったです。しかも日本の温泉療法は有名です。

今回のホームステイでは、私は日本の多くの文化を感じました。たとえば食事では、山下さんの奥さんの朝御飯は本当にとっても美味しかったです。日本の朝食はいろいろな食べ物があり、魚、盛り付け、味噌汁などです。中華の朝食は平日は、饅頭、豆乳、小籠包などです。日本式朝食と中国式朝食の差は大きいです。山下さんの奥

さんの作った三日間の朝食に、「本当にありがとうございます。私から見て中国と日本の最大の違う点は教育制度だと思いました。中国の教育制度は小学校に基礎知識を固めることが重視されています。九年義務教育制度の中に中国の学生の学習は大切です。ますます勉強の量が増えていきます。中国人は知識があなたの人生を変えることができると思っています。一方、日本の学生の生活は本当に羨ましい。平日にもテニスや野球の試合などをします。最後の日、山下さんご夫妻とつばささんは私を連れて武田神社へ行きました。私の見聞がまた広がりました。



最後に、私にこんな機会を与えてくれた公益財団法人日本中国国際教育交流協会とフジ国際語学院に感謝します。今まだ、私は日本語があまり上手ではないので、詳しい説明ができませんでしたが、山下さんご夫妻、この間は本当にお世話になりました。また、お土産は本当にありがとうございました。ひかるさんと翼さんもありがとうございました。私は優秀な留学生になるために、頑張ります！！

## 縁あれば千里

白 瑞

「縁あれば千里」中国にはこの言葉があり、その意味は縁あれば千里隔てても会えるという意味だ。私は千里以上の中国から来て、成瀬先生ご家族との出会いは偶然の偶然だ。その出会いは如何にも縁だ。

夏休みの前に、学校の先生からホームステイのことを聞いた。ホームステイは日本人と直接交流するいい機会だと思う。でもいきなり日本人の家を訪問することはとても不安だった。私は日本語があまり上手ではなくて、交流できるかどうかすごく心配していた。

8月8日、全員が約束した通りに8時半頃新宿駅東口に集合した。初めて東京以外の地域に行くので、電車の中で私は興奮していた。1時37分後、あずさ9号は甲府駅に到着した。私はずっと緊張していた、初対面の挨拶は何を話すかとか、もし緊張しすぎて話せない場合はどうするかとか、落ち着かなかった。合流した後で甲府駅の広いところで簡単に自己紹介した。私は成瀬先生ご家族と一緒に車に乗って、レストランに行った。地元の豚肉を食べた、とてもおいしかった。

成瀬先生ご家族はとても優しい方々であり、車の中で娘さんと息子さんが自分の名前を書いて、読み方も教えてくれた。成瀬先生ご一家は、奥様、娘さん、息子さんの4人家族だ。奥様の知絵さんは優しいひとだ。娘さんの優貴ちゃんはとてもかわいい子だ。同じ漫画とアニメが好きだからたくさん話をした。私の緊張感はだんだんなくなった。息子さんの聡貴くんはすごく元気な小学生だ。私はひとりっ子だから兄弟がいる人を羨ましく思っていた。お二人が自分の妹と弟みたいだと感じた、本当に貴重な体験になった。

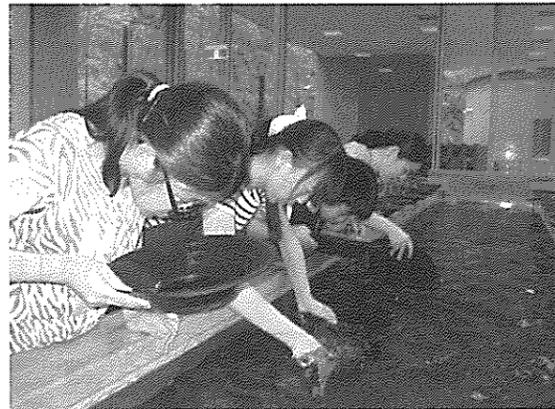
食事の後で、成瀬先生の家へ向かった。成瀬先生の家は山梨県の南部町なので、車で1時半ぐらいかかった。途中で見えた山々は重なって全部緑だった。富士川もきれいだし、コサギが何羽も見れた。残念ながら、少し雨が降っていた。遠い景色はほとんど見えなかった。山梨県の空気は東京より清々しいと思った。本当に日常生活から離れ、不思議な三日間の体験が始まったような気がした。

まず、湯之奥金山博物館を参観した。戦国時代の武田信玄を支えた金山としてすごく有名なところだ。そして、一番おもしろいのは砂金採り体験だった。金を採るための専用の器を使い、砂と金の重さの違いにより、砂の中に混じっている砂金を採取する。私は自分で採った6粒の砂金を記念用のボトルに入れて持ち帰った。優貴ちゃんはすごく上手で、たくさん砂金を採った。みんな楽しんでした。この後、日蓮聖人が晩年の九年間をお過ごしになられた身延山久遠寺に行った。そこで、険しい段階を登り、かなり疲れた。だが聡貴くんは驚くほど元気



だった。ずっと走って階段を登っていた。

成瀬先生ご夫婦は私のためにいろいろな準備をしてくださった。私が歴史に興味があるのを考えてくださり、この短い時間でいろいろな歴史遺跡を参観した。この短い時間に私は日本の仏教の歴史を少し学んだ。もともと日本の仏教の戒律制度は中国の唐の時代鑑真和尚が整備したものだ。それで、日本と中国の関係は古来非常に密接で、しばしば「一衣帯水」と形容された。私は中日両国がお互いにとっても重要な仲間だと感じている。ご夫婦のご配慮に、とても感動させられた。



成瀬先生ご家族が住んでいる南部町は山梨県の一歩南のところだ。静岡県も近い。家の外は富士山が見える。二日目、私たちは静岡県の久能山東照宮に行った。久能山東照宮は徳川家康を祭神とする東照宮である。これは日本の国宝であり、古い建物は日本の伝統的な美しい宮殿である。それに、成瀬先生は正しい拝法を教えてください、改めて日本人は日本の伝統をきちんと守っていると感じた。そして、私はもっと日本の歴史を勉強したいと感じた。その後、海岸に行き、昼ご飯は桜えびを食べた。残念ながら、曇りのせいで富士山が見えなかった。しかし美しい桜えびのハンカチと巾着袋をもらった。本当に感謝している。

最後の日は笛吹市で篠笛を勉強し、少し難しいと感じた。篠笛をもらったのは予想外だった。学びの広場の方々にも感謝している。今後も自分で篠笛を練習したいと思う。

今回のホームステイはとても有意義だったと思う。まず、機会を与えてくださった日本中国国際教育交流協会とフジ国際語学院に感謝している。そして、成瀬先生ご家族に感謝している。私は日本語があまり上手ではないので、成瀬先生と知絵さんはもちろん、優貴ちゃんと聡貴くんまで優しく、ゆっくり話してくれた。分かりやすく説明してくださって、本当に感謝している。三日間の記念写真とお土産をたくさんもらった。私は心から感謝している。また機会があればもう一度成瀬先生ご家族とお会いしたい。この貴重な縁は大切に守る。成瀬先生、知絵さん、優貴ちゃん、聡貴くん、お世話になりました、本当にありがとうございました。

一日の活動が終わり、私たちは南部町に向かっていた。晩ご飯は手づくりのそばと知絵さんが作った天ぷらだ。成瀬先生、優貴ちゃん、聡貴くんと私の四人はおばあちゃんの家でそばを作った。初めて自分でそばを作り、とても楽しかった。知恵さんは料理がすごく上手で、天ぷらが美味しかった。それに、ちょっと納豆に挑戦した。案外美味しいと思った。食事中、いろいろな中国と日本の生活の違いを話した。日本人の日常生活にふれることができた。食事の後で、子供たちと私は一緒に人生ゲームで遊んだ。それまで全然知らなかった人生ゲームは意外とおもしろかった。優貴ちゃんと聡貴くんはゆっくりゲームのルールを説明してくれて、本当に優しい子だと思った。



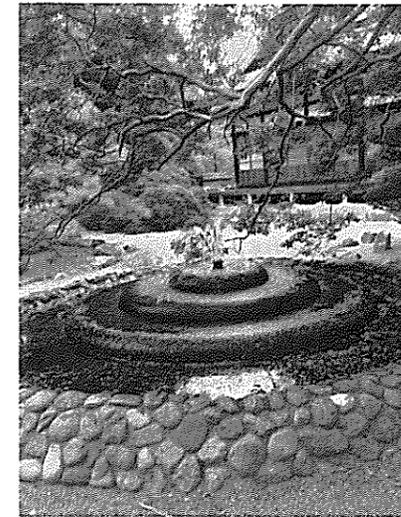
## 山梨県での生活

鐘 英姿

日本へくる前に、いろいろな日本の文化について勉強しましたが、日本人と一緒に住んだことはありませんでした。今回のホームステイで、山梨県の有名なほうとうを食べて、最もきれいな湧泉を見て、日本人の生活を体験して、とても貴重な経験をしました。

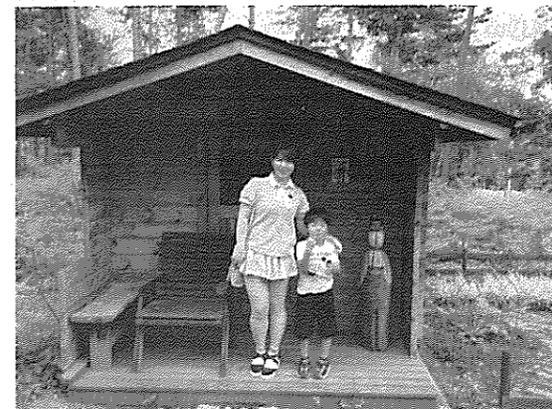
初めに八巻夫婦にあったとき、緊張しました。奥様はわたしに親切に話してくれましたから、だんだん緊張が解けました。みんな私を「えいちゃん」と呼びました。そして、わたしは八巻夫婦の息子さんたちを「あおちゃん」と「すずちゃん」と呼びました。

最初、八巻夫婦はわたしを連れてほうとう屋に行きました。八巻さんは「ほうとうは山梨県の有名なうどんですよ。」と言いました。ほうとうはカボチャを軸とした野菜、山菜のみで具材が構成されているうどん、本当に美味しかったです。そして、富士山の下湧泉を見に行きました。その泉は澄みきっていて底まで見えました。池の中を泳ぐ魚の姿もはっきりと観察できました。金色の魚はアルビノニジマスで、珍しいです。エリア内には、お土産屋さんや飲食店もたくさんあったので、お茶を飲みながらゆったりと座っていると、時間がたつのもわすれてしまいました。その後で、水族館に行きました。ニジマスとか、ウグイとか、ナマズとか、アトラスオオカブトとか、いろいろな魚と虫の名前を勉強しました。本当に面白かったです。水族館を出てから空がだんだん暗くなってきました。途中で写真を撮りました。空気がよくて、景色がきれいでした。夕方奥様はご飯を作ってくれました。私はあおちゃんと一緒にハンバーグを作りました。あおちゃんは子どもですが、たべ



のを作るときは本当に真面目でした。レシピのとおり、きれいなハンバーグができました。あおちゃんは「えいちゃん自分で作ったんだよ、すごいね。」と言ってきて、優しかったです。晩ご飯は焼うりとか、お刺身とか、焼き鳥とかをたべました。おいしかったです。日本料理と中華料理は全然違うと思います。私は歯が痛かったとき、八巻さんが外で薬を買ってくれて感動しました。そして、お風呂に入って、一日の疲れを癒して、畳で寝ました。

二日目の朝、お寺に行きました。きれいでした。周りには山水がありました。そして、アウトレットパークへ買い物にいきました。日本の可愛いタオルを買いました。それから、馬に乗って、鹿にえさをやりました。そして、えほ



ん村へ行って、人形劇を觀賞して、面白い画集を見ました。その後で、ぶどう園にいきました。山梨県はもともとぶどうが有名です。ワインは苦いですが、ぶどうはあまいです。途中で、一つ一つのぶどうが袋に包まれていて、驚きました。日本人は細部まで気を使っていて、とてもまじめだと思います。二日目の晩ご飯はカレーライスでした。八巻さんは、「日本人は日本のカレーが大好きだ」と言いました。それは初めて聞きました。お風呂の後で、息子さんと一緒にゲームをして、言われた単語のものを探し出しました。知らない単語は息子さんが絵をかいてくれました。息子さんは絵が上手で、わたしはたくさん動物や植物などの名前がわかりました。

三日目は蕎麦屋に行って、妖怪館をみました。日本の妖怪をみました。日本の妖怪文化は面白いです。背筋が凍るほど怖いものから、思わず和笑みがこぼれるようなかわいらしいものまで、日本の独特の宗教観、自然観が生み出した豊かな想像の世界が広がっているそうです。その日は笛吹市のスコレーパリオにいきました。みんなは笛を吹いてくれて、すばしかったです。日本の教育は徳智体美とって、全面的に発展させることを目指しているそうです。子供たちは音楽と絵画が上手でした。

三日間のホームステイがおわりました。みんなと車で別れました。列車が駅を出るとき、八巻さん一家は駅のフェンスのところで手を振ってくれました。わたしは涙を流しました。先生も八巻さん夫婦も息子さんたちもみんな優しい人でした。家族のように、わたしに配慮してくれました。この思い出はわたしにとって最も大切なものです。ホームステイに参加できて、たのしかったです。日中国際教育交流協会の皆様に感謝します。みんなに会えたことはありがたく貴重な縁だと思っています。また、日本の生活を体験したことも貴重な記憶になりました。ありがとうございました。



三日間のホームステイは本当にあっという間でした。山梨の空気を味わい、楽しい時間をたっぷり満喫することができました。ホストファミリーの篠原ご夫婦と共に過ごした、この忘れられない三日間は私にとって何事にも代えられないとても大事な思い出となりました。

8日朝、期待と少しの緊張を抱いて、甲府行の電車に乗りました。10時30分頃、初めて山梨の地を踏みました。甲府駅で、篠原さんは既に待っていてくださいました。篠原さんは北杜市明野小学校の校長先生なので、会う前はもしかしたら厳しい方かもしれないと思いましたが、実は親切で、ユーモアな方でした。昼食の後、明野にある向日葵畑に行き、そこにいっぱい生えている向日葵の海をみました。近くに行くと、どこまでも果てしない花に囲まれて、とても壮観でした。畑の中心に花でつくられた大きいクローバーがありました。それは明野小学校の子どもたちがつくったそうです。

午後は、北杜市明野小学校に案内していただきました。校舎が広くて、周りの環境もきれいな学校でした。夏休み中でしたが、子どもたちがプールで元気に泳いでいて、職員室にも先生が何人かいらっしゃって、さまざまなことについて、お話をさせていただきました。見学してから、篠原さんのお宅に伺いました。そして篠原さんの奥さん、久美子さんにお目にかかりました。とても親切で、優しい方でした。

夜、美味しいカレーをいただいて、いろいろな話をお互いにかわすことができました。例えば、中国人は何を食べているか、食材をどうやって料理するかなどのことです。中国でもゴーヤを普通に食べているとか、餃子より水餃子のほうが一般的だと話したら、篠原ご夫婦は驚かれました。私もやはり日本でも中国でも、皆似ている生活を送っているということを感じました。

翌日の朝、私の趣味が山登りだと伝えると、篠原ご夫婦は美しの森へ連れて行ってくださり、そこでハイキングを楽しみました。あんまり高くない山ですが、頂上についたら、相当壮麗な景色を見ることができました。見渡すかぎり一面の緑、正に「美しの森」の名前にふさわしい木の海洋が朝霧に包まれていました。地と空のつないでところにあるうねりながら長く続いて連山は、波のような低い雲の中でぼんやり見えるだけ、まるで仙境みたいでした。実家も森が多いところですが、こんなに広い原野がないので、心を揺り動かされました。

お昼はスパティオ体験工房で手作りそばに挑戦しました。初めはそれほど難しいことではないと思いましたが、実際につくったら、これが決して簡単な仕事ではないことが分かりました。

午後はシルクロード美術館と野辺山天文台を見学しました。国立野辺山天文台にあるアンテナ直径45メートルの巨大電波望遠鏡でまた驚きました。子どもの時からずっと天文学に興味を抱いていたので、今回天文台を見学できて、本当に嬉しかったです。そして、宇宙射線についてもいろいろ学習ができ、いい勉強になりました。二日目の夕飯は、お好み焼きと焼肉でした。毎日毎日コンビニのお弁当で生活している私にとっては、これは贅沢なご馳走でした。

三日目の朝食後、笛吹市に行き、他のホストファミリーと合流しました。最初に行ったのは笛吹市スクレーバリオです。そこで子どもたちの笛演奏を見ました。演奏者の子どもたちもとても上手でした。後は笛を吹くのに挑戦しましたが、私は下手なので、どうしても音を出すことができませんでした。笛の先生に聞くと、笛も日本の伝統楽器の一種であり、神楽などの行事を行う時に、この笛を吹くそうです。でも最近日本の若者たちは笛のような伝統文化にあんまり興味がないので、笛を習う人が減る一方だそうです。そのため、こうやって子どもたちを集めて、笛を教えて、伝統が消えないようにしているそうです。中国も今、この問題に直面しています。人々に誇れている絵画、陶器、芸術品といった中華文化の精髓は、もう誰も作れなくなったものがたくさんあります。ですから、伝統文化を守っているかれらの姿は本当に素敵だと思っています。

午後、ホストファミリーと学生全員との交流会に参加しました。そのあと、いよいよお別れの時が来ました。



寂しい顔が隠せず、何度も振り返って、手を振りましたが、何もいえませんでした。

この三日間、本当にいろいろ勉強になりました。教科書のものとは違い、日本の生活をこの体で確かに体験することができました。毎日語学学校、塾、マンションに行き帰りをしている私にとっては実に貴重な体験でした。今回の収穫は、篠原ご夫婦と知り合いになり、そして日本人の方々も私みたいな普通の食べ物を食べていて、普通のことをして、普通の生活を送っている普通の人間であることを心から感じました。これは当たり前のことだと思われているかもしれませんが、留学生として日本に来た私は、国籍が違い、言語が違い、見る番組が違い、いつの間にかこんな当たり前のことを忘れてしまっていました。日本人を単なる「日本人」として認識してしまっていました。今争っている人もそうかもしれません。マスコミやいろいろなところからの情報を手にいれて、目の前のことしか見えないと、つい大事なことを見失ってしまいました。相手も自分みたいなちゃんと生きている普通の人ということさえ意識すれば、少しでも相手の気持ちを理解し、話し合えるようになるのではないのでしょうか。ですから、このホームステイのような活動は、大変意味があると思います。人を全部変えられるわけではありませんが、少しずつ理解を深めれば、きっと分かり合える日がくるでしょう。

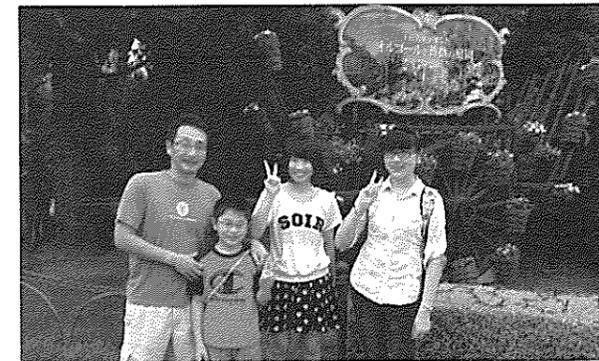
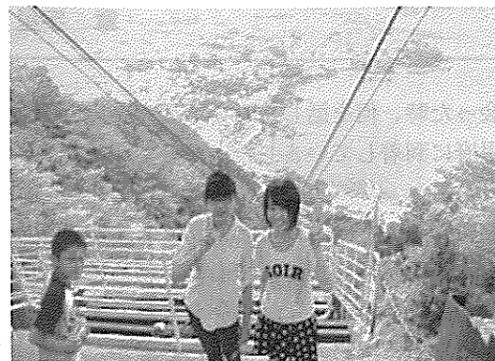
最後に、もう一度、篠原ご夫婦にお礼申し上げます。三日間、本当にいろいろお世話になりました。篠原さんは、私をいろいろなところに連れて行って、いろいろなことを紹介していただきました。久美子さんも私の話し相手になって、百人一首やオセロなどいろいろなゲームで楽しませていただきました。お二人はとても親切にしてくださいました。初めてお会いした方々なのに、初めて伺ったお宅なのに、まるで実家に帰ったような気がしました。本当に、ありがとうございました。

8月8日、私が期待していたホームステイの日がやって来た。この日はいつもよりずっと早く起きた。興奮した気持ちを抱きながら7人一緒に甲府への道を踏み出した。私はちょうど窓側の席だったので、外の景色が見れて嬉しかった。だんだん都会を離れて、緑の山が目映ってきた。海みたいだった。いつの間にか目的地の甲府に着いた。佐藤さんご夫妻はもう待っていた。私の名前が呼ばれると、佐藤先生の家族の皆さんは、微笑んでくれた。私に手を振ってくれ、親切そうだ。簡単に挨拶して、私も緊張がほぐれた。私の日本語はまだまだだ。それなのに、佐藤さんご夫妻がずっと私を励ましてくれて日本語で交流する。少しずつ落ち着いてきた。

最初、佐藤さんご夫妻は私を連れてレストランへ行った。お互いに自己紹介をした。それで、佐藤さんご夫妻は、私をせいちゃんと呼ぶことにした。娘さんの光ちゃんと私は同じ年齢なので、彼女と話すのが本当に楽しかった。私はずっと日本の女の子の友達を作りたいと思っていたので、Lineで友達になった。浩二郎ちゃんはちょっと恥かしがりやだけどかわいい男の子、つちゃんの性格は物静かで親和力があって可愛い女の子だった。

今回のホームステイは、本当におもしろかった。いろいろな観光地へ行った。初日は光ちゃん、つちゃんと浩二郎ちゃん、佐藤さんご夫妻と一緒に河口湖へ行った。美しい自然の風光を鑑賞した。観光地から山下の景色が全部見える。富士山が見えなかったのが残念だったが、富士急ハイランドはよく見えた。景色が緑の海のように見えて、都会の騒がしい生活と離れ、心がすっと落ちついた。言葉では言い表せないほどの美しさだった。

午後、オルゴールと薔薇の庭園へ行った。一番きれいな所だったと思う。王侯貴族が愛したと書いてあった庭園の中にたくさん花や木があって、音楽の天堂になっていた。池で白鳥が泳いでいた。一番特別な物は人形だ。



いろいろな人形は、人々に感動の曲を奏でていて不思議だと感じた。珍しい人形はアクションだけでなく微妙な表情もある。科学技術の高さにとても感嘆した。

その日の夜、佐藤さんの奥さんは私にきれいな浴衣を着せてくれ、みんなで忍野八海のお祭りに行った。銅鑼や太鼓の音が高らかに響いていた。中国の春節のように賑やかだった。私たちは、地元のそばを食べた。とてもおいしかった。だんだんと太鼓の音が止み、やっと人の心を奮い立たせた。時間が来たと分かった。花火が始まった。こんなにすばらしい花火は初めて見た。以前テレビで花火を見たことがある。今回私の目の前に現れた花火に感動した。その瞬間に幸せを感じた。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が全部見えた。虹の七色のように見えた。いろいろな形の花火を見ながら心の中で静かに願いを込めていた。一日の疲れと楽しさを持って、初めて畳で眠った。ぐっすりと寝た。第一日が終わった。

次の日、富士山へ行った。山に登れなかったのが残念だが、バスに乗っている途中で山が見えたのはよかった。周りは緑の海に囲まれて、本当にきれいだと思った。やっと五合目に到着した。富士山の頂上は曇っていてよく見えなくて残念だったが、私はそれを忘れるほど興奮した。一昨日、佐藤先生は私にメールを送ってくれた。わざわざ富士山の写真を撮って送ってくれた。本当に感謝した。富士山はとても壮観だ。さすがに世界の山だと思った。そして、私たちは神社に行った。佐藤さんは私に神社での正しい拝法を教えてくれた。日本の拝法と中国の拝法は全然違う。佐藤先生は、二拝二拍手一拝の方法をちゃんと教えてくれた。しかし、中国では平伏すことと拝することが一般的だ。そう見ると、日本と中国の文化は共通点と相違点が存在していると感じた。山の上から眺めて雲が私の周りにたくさんあって嬉しかった。

私が最も印象深かったのは、おばさんの家でつちゃんと光ちゃんと一緒に餃子とたこ焼きを作ったことだ。やる気満々ですぐ全部できた。自分の手で餃子を作ったのは本当に得難いチャンスだった。おばさんの制作指導の元で、たこ焼き作りも学んだ。本当に美味しかった。テレビを見ながらしゃべった。みんな笑った。その一瞬、みんなと一緒にいるのが、まるで家族のように暖かく感じた。



私が驚いたのは日本のバドミントンだ。中国のバドミントンは日本よりずっと小さい。私はバドミントンが好きだけど、慣れないからよくできなかった。光ちゃんはよくできた。

10日の午後、佐藤先生は私に山梨県立科学館へ連れて行ってくれた。そこには話せるスタンプロボットちゃんと機動士ガンダムがあって私は超面白かった。いろいろな機器で遊んで少年時代に戻ったように楽しかった。

楽しい時間はいつも短い。三日間のホームステイは必ず私の人生の貴重な記憶になると思う。ずっと忘れない。この間のお世話を佐藤先生と家族に感謝したい。もう一

回「ありがとう」と言いたい。私は今まだ日本語があまり上手ではないから、理解できないとき佐藤先生はいつも詳しい説明をしてくれた。ありがとうございました。つちゃんと光ちゃんと浩二郎ちゃんもありがとう。私たちはあれからずっと連絡し合っている。最後に、私にこんな機会を与えてくれた公益財団法人日本中国国際教育交流協会に感謝したい。この作文を、私のホームステイ生活の記念にしたい。

## 「夏の山梨ホームステイ」感想

章 宇星

落ち着かない心で、新宿から電車に乗りました。和子先生に会った時、何を話したらいいのかと考えながら、窓の外の景色を見ていました。そしたら無意識のうちに、もう甲府に到着していました。そして和子先生に会いました。

四月に日本へきてから、もう半年ぐらい過ぎました。時々寮の管理人と話したことがありますが、初めて日本人と一緒に住みますから、少し不安で、自分の日本語のレベルに自信が持てませんでした。初めに和子先生は家がお寺だと言いました。「はいはい」と言って聞いていましたが、その意味は分からなかったです。家に着いた時、本当にびっくりしました。心月寺とって、広すぎて、迷いやすい本物のお寺でした。静かだし、緑も多

いし、綺麗なお寺でした。でも、おかしかったのは、先の不安感が消えていました。僕は、中国の仏教理論を認めています。それから、和子先生の家族はとても親切な人だと思いました。

この三日間、僕をたくさん面白い所へ連れて行ってくれました。特に驚いたのは、家の横の日本三奇橋の猿橋です。長い歴史がある橋です。とても面白いデザインです。それから、新鮮な刺身とわさびの本物もはじめて見ました。なんか不思議な感動になりました。恵林寺の鶯廊下とか、与勇輝館とか大切な記憶になりました。山梨県の果物と野菜はとても有名です。あんなに甘い桃は山梨県の桃しかないと思います。山梨県はどこでも緑景色です。うるさい都会から離れて、お鐘を鳴らすこと、座禅とか、お掃除とかをやりました。体と心が緩和されました。起きた時に、朝ご飯が準備されていました。そんな日はもう久しぶりです。お客さんになって、何もなくて、恥ずかしかったです。先生の友達にも紹介してくれて、僕を家族みたいに扱ってくれました。石野先生、魚屋さん、剣道の先生も（もうし訳ありませんが、日本人の名前はよくおぼえられませんでした。）山梨県のいろんなところを案内してくれました。みんなの息子さんになったようで、嬉しかったです。

この三日間の主人公が一人います。心月寺のお主事、和尚さんです。いつも顔がずっと微笑んでいて、まるで大仏のようでした。この三日間、できるだけ、和尚さんと同じ生活するようにしました。毎日起きて、座禅をやって、お掃除して、朝ご飯を食べて…。和尚さんはいろいろな中国の文化に非常に興味があります。生活の習慣について話してみると、やはり中国と日本では違うことがおこったです。日本の生活に慣れられたかどうかと聞かれて、僕には日中関係がまるでとなりのようで、大きな差別があることもないと思いました。はなしをしておもしろい問題には一緒に笑ったりしました。ご縁があって、この時間に、この場所で、和子先生と和尚さんと知り合うことができました。本当に良かったです。

中国の仏教理論は、菩薩を信じて信徒が存在するかどうかを求めません。人間は、自分の行為に拘束して欲しいです。鐘も撞木のあたり柄、因果応報という意味です。昔ある中国の和尚さんが言ったことを聞きました。「あなたが悪いことしたい時、最後にやったかどうか、あなたにもうしました。心の強さは無限だ、自制能力は有限だ。」

和子先生が家族の写真を見せてくれました。幸せな笑顔で静かと友好を感じました。いくら日中文化の差別があっても、どこの人間も、やはり人間です。平和な生活がほしい気持ちは同じだと思います。緑、涼しい天気、親切な家族、山梨の空はとても青かったです。

最後に、お手紙で連絡すること、日本語が必ず速く上手になること、優秀な留学生になるために頑張ることを約束しました。

みんな、お元気で、また会えますように。



## ■ 第10回日本語作文コンクール (教育交流・研究等助成事業)

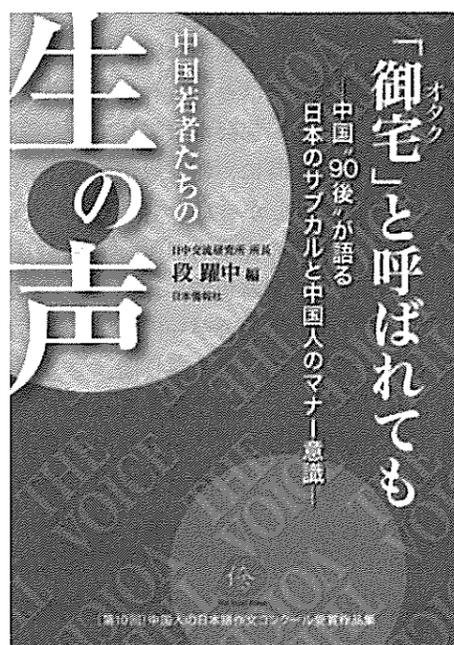
2014年度第10回日本語作文コンクール (日本僑報社主催、外務省・在中国日本大使館後援、朝日新聞社など協賛) には、中国全土の省市区の196校から4133編の応募がありました。

本年度のテーマは「ACG (アニメ・コミック・ゲーム) と私」、「公共マナーと中国人」の二つで、いずれの作品からも、次世代の中国を担う若者たちが前向きで柔軟性に富んだ考え方をもっているということが感じ取れました。協会はこの事業を後援し、毎年最終審査員に加わり、日本中国国際教育交流協会賞 (教育賞) 2編を選出しています。本年度の教育賞受賞者は、姚儷瑾さんの「ACGと日中関係」と徐曼さんの「中国人マナー改革の鍵」でした。

最優秀賞・日本大使賞 (日本一週間招待) は、何と当協会が教育賞に推薦した姚儷瑾さんの「ACGと日中関係」が受賞しました。以下、教育賞作品を掲載します。

### ★教育賞・日本中国国際教育交流協会賞 (5万円相当)

姚儷瑾 東華大学  
徐曼 南通大学杏林学院



### ACGと日中関係

東華大学 姚儷瑾



「殺されたから殺して、殺したから殺されて、それで本当に最後は平和になるのか」これは『機動戦士ガンダムSEED』で、幼馴染の主人公二人が立場の違いにより、相手を殺さなければならない状況で抱いた疑問です。

「戦争の意義って何？」これは私がこのアニメを見た後ずっと考え続けている問題です。

当時、十四歳でしかなかった私には、この問題は意味深すぎたのですが、日本のACGは精緻な場面のある作品だけではなく、ACGを通じて伝えたい作者の世界観も面白く、見る価値があると私は感じました。例えば『ガンダムSEED』の中では、遺伝子工学というハイテクをめぐる起きた倫理的問題が発端で戦争が起こるのですが、

アニメを見る前はこんな展開になるとは思いもしませんでした。また、このアニメはフィクションですが、描かれている戦争の場面は大変リアルで、命の脆さを丁寧に描いていました。そして、この戦争の切なさは私の頭に深く印象に残り、今の世界情勢を少し自分の身に近づけて考えてみようと思い始めました。このアニメがきっかけで、私は日本のACGに興味を持ち、台詞をより理解するため日本語を勉強し始めました。

『ガンダムSEED』を見てから既に六年。今、私は日本語学部の学生です。日本語を勉強して二年目、授業中先生と学生が何度も日中関係をめぐって、討論をしました。「日中関係がますます悪化し、最悪の場合、戦争になる…」先生がそう話したそばから、私は『ガンダムSEED』を思い出しました。アニメの中に描かれていた、戦乱のため、自分が自分の親友を殺さなければならない場面。私は絶対に経験したくないです。こう考えた私は、あるACGマニアが集まるウェブサイトにごう記しました。

「人が命を失っても、戦争で訴えたいものは何ですか。利益、正義、それとも、ただ殺された人のための復讐ですか。もし戦争が起これば、必ず誰かが殺されます。殺された人のため、また誰かを殺します。こうして戦争

は永遠に続きます。その戦争の傷はどれほど大きい勝利でも癒せません。私は心から日中関係の平和を祈ります。」すると二日目、意外なことに、ある日本人が私のコメントに返事をくれたのです。

「私もそう思いますよ。」

返事は大変短いものでしたが、私にもたらされた感動は大きかったです。ACGがきっかけで日本人と交流できることには驚きましたが、より収穫だったのは日中の平和を祈っているのが私だけでなく、日本人の中にも中国に好意を寄せている人がいることが分かったことです。その後、ACGがきっかけで何度も日本人と交流する機会を得ました。互いに好きなアニメについて話し合っていると、様々な共通点が見つかりました。国籍が違って、彼らは私の周囲の友達と全く同じです。交流した後、中国人への印象が変わったと私に言ってくれた日本人もいます。日本語学部の一学生にすぎない私ですが、自分の力が少しでも役立つ気がして、嬉しかったです。今の日中関係悪化の原因は、政治の原因以外に、双方の理解不足も原因の一つだと考えます。中日戦争の暗い影の下で、日本人全員が悪いと思っている中国人は少なくないでしょう。しかし、これは事実ではありません。現在、中国人に人気がある日本のACGにはこのような誤解を解く力が秘められています。好きなACGについて話し合いながら、相手国の姿を確認し合う、これは新たな文化交流の形になるかもしれません。

そして、日本語を学ぶ学生は可能な限り、日中の交流を深めていくべきだと思います。例えば、定期的に日本のACGマニア大会を開催するなど、同じ興味を持つ日本人と中国人を誘い、私達が通訳として、彼らの交流の手助けをすれば、きっとみないいい友達になれるはずですよ。小さなことから努力すれば、きっといつか日中関係がよくなると思います。

『ガンダムSEED』のラストのように、永遠の平和を祈ります。

### 「中国人マナー改革の鍵」

南通大学杏林学院 徐曼



「最近悲しかった事は何？」と聞かれたら、あなたはどうか答えるだろうか。私は、「中国人お断りのホテルやレストランが海外に出現したこと」と答える。「私は何も悪いことしてないのに、何で？」この事実をインターネットで知った時、心の中で私はそう叫んでいた。

皆さんがご存知の様に、中国には五千年の歴史がある。五千年の歴史の流れの中で、時代の絶え間ない変化と共に、我々はたくさんの礼儀の文化を形成してきた。そのため、中国は「礼儀の国」と言われる。これは、中国人が一丸となって努力した結果以外の何ものでもないし、その事を私は誇りに思っている。しかし、残念ながらこれらの礼儀が全て良いマナーというわけでは無い。

日頃生活していて、私が目にする公共マナーに関して問題がある中国人の行動には、次の様なものがある。まず一つ目は、路上に痰を吐き放題であること。とにかく汚い。二つ目は、バスが来ると列が崩れ、一斉にバスに群がること。バスを先頭で待っていても、うっかりすると乗るのが最後になってしまう。三つ目は、公共の場で親が所構わず子供に小便をさせること。しかも、近くにトイレがあってもトイレまで行かず、路上でさせる。日本なら、路上が濡れていたら、誰かが水を撒いたのだろうと考えるだろう、でも中国では、子供の小便だろうと考えるのが普通なのである。そして、四つ目は、どんな場所でも大声で電話すること。場所によっては、周りにいる人にとって大変な迷惑となる。これらの問題行動全てに共通して言えることは、何だろうか。実にどれもが、自分の欲求を最優先させた行動であり、他人の目を全く気にしていないという事だろう。

では、人はどんな時に他人の目を気にするのだろうか。それは、人と違う行動をして恥ずかしさを感じる時だろう。中国では、これらの問題行動が、人と違う行為にならない点が問題なのである。そして、その理由は三つある。

まず一つ目は、社会的背景である。中国の社会は、昔から権力とお金が絶対的な力を持つ社会である。「お金を払えば、何をしても構わない」という中国式の考え方が形成されてしまったのだ。そして二つ目は、教育的背景である。中国は長きに渡り科挙制度を実行してきた。学問を偏重し、マナー教育は疎かにされてきたのだ。

そのため、公共マナーという概念が希薄なのである。最後の三つ目は、文化的背景である。遠慮をしないことが中国の文化であり、人に何かしてもらった時でも、お礼を言う代わりに「他人行儀だ」と嫌がられる。人の目、人の気持ちを気にすれば、遠慮の気持ちが生まれてしまうのだ。

この様な理由から、五千年の長きに渡り根付いてしまった陋習を数十年で改めるのは難しい事である。しかし方法はある。それは、「他人の目を意識する」様にすることだ。これこそが、中国人のマナー改革の鍵と言える。「そんなの無理に決まってるよ」と考える人も多いただろう。しかし、そう考える人は、これまで何かしてみたのだろうか。きっと何も行動を起こさなかった筈だ。

私は二つの側面から同時に変革すべきだと考える。一つは、外部からの変革である。国家がマナーに関連する法律の整備及び制定をし、しっかりとした取り締まりを実施することである。更には、学校でマナーを科目として新設する事も必要だ。もう一つは、内部からの変革である。各個人が、「自分の行動が、中国人の印象を決定する」という自覚を持って、自らの行動に注意を払うことが必要だ。「他人行儀を嫌う」という我々中国人の特性は、良い事であるが、場合により柔軟に対応すべきだ。時代は常に変化している。我々の思想も変化を求められているのだ。文明的行動が求められる現代、中国人マナー改革の鍵「他人の目を意識する」ことで、我々は真の国際人として認められる中国人となろう。

## ■ 資料

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 20

2014. 5. 19

# 共生力

HP : <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>

Tel : 03-3222-4190 Fax : 03-3222-4199

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-9 第2太陽ビル3F

発行人 : 黒田文男

## 中国宋慶齡基金会を訪問

3月23日～25日に、協会代表（黒田代表理事・山中業務執行理事・赤岡理事）は、北京市の中国宋慶齡基金会を訪問し、井頓泉副主席と懇談し、今後の協力体制を確認しました。

会談では唐九紅基金部長、王プロジェクト処長・劉副所長と今後の活動について率直な意見交換を行いました。



基金会玄関で井頓泉副主席と黒田代表理事ら

### 三重での成果と今後

黒田 三重での研修会は、各方面からとても良い評価を得ている。参加者の感想文にも感銘を受けた。日中教育交流に貢献できたと思う。今後の取り組みについて協会の考えをお伝えしたい。①9月13～17日、上海中心に10名ほどの第16次訪中団を派遣したい。小学校の訪問や先生方との交流等を希望している。②音楽教師養成の共同プロジェクトは続けていきたい。易県については一区切りとしたい。易県は教育環境も整い自立できる段階に来ていると思う。先生方も大変優秀で音楽教育を推進してきている。2014年度は引き続き100万円をセミナーに支援したい。③今後のプロジェクトの候補地は、宋慶齡基金会と協議の上、2年ぐらいかけて決めていきたい。④訪中は毎年ではなく、2～3年に一度ぐらいを考えていきたい。

唐 昨年三重の研修会は、今までの積み上げによって成果が実り、とても有意義だった。研修会の参加者とはそ

## (1) 会報「共生力」 20号、21号

の後も連絡をしておいている。教師のレベルアップ、能力アップに大いに寄与した。

### 次のプロジェクト候補地

唐 当該地の希望、受け入れ態勢の状態、宋慶齡基金会と合作経験の有無等を考慮して考えたい。北京周辺ないしは上海周辺はどうか。北京の周りにも山西省・山東省・内モンゴルなど貧しい地域が多い。内モンゴルは音楽的な要素が強く、音楽教育の交流としては良いのではないかと。山東省の東平はとても貧しくて、教育支援プロジェクトを実施するのに良いと思う。北京からも近いし、2～3時間くらいだと思う。山西省は北京から3時間くらい。

上海が一番進んでいるところなのでリーダーの見学場所として意義があると思う。中国のトップレベルとの教育交流をするのによい。見学・交流は基金会の幼稚園や小学校もあるので対応できる。中学校や高校も要望があれば対応してみる。

黒田 候補地は、訪中・訪日団が交流できる地域が良いのではないかと。候補地のデータをお願いしたい。今年度(2014)は訪中を行いたい。来年度(2015)は役員が具体的な候補地に行って、支援の場所を決めるということではどうかと考えている。教育支援については、良いレベルのものを提案していきたい。

唐 教育支援については、政府も一生懸命になってきている。小学校から大学まで貧しい生徒には奨学金もある。その場所の要望にそったソフト面・ハード面の支援が役立つ。当地の政府もそうした動きの中で支援してくれる。黒田 宋慶齡基金会と日中国際教育交流協会の共同の力が、教育委員会や地方政府も巻き込んで教育支援に力を入れたという意味があったのではないかと。近い将来(2016年くらいに)訪日団はできますか。

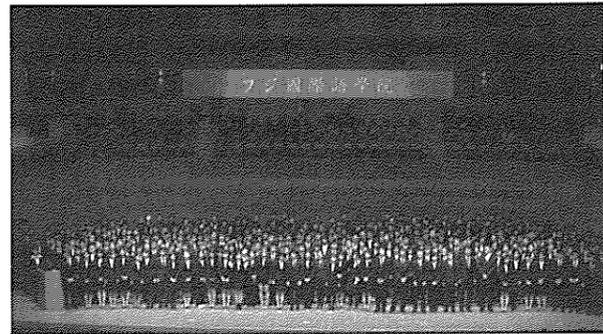
唐 易県だけでなくさらにいろんな場所に、もっと友情を広げていきたい。中国人は初めて会ってから二日目には、グンと友情が深まる。

黒田 日中関係は今非常に厳しい。しかし、宋慶齡基金会については、非常に懐が深い団体だと認識している。私たちは、みなさんと友情を育む中でとてもいい信頼関係を築いてきている。これからも遠慮なく率直に話し合っていきたい。(赤岡記)



唐九紅部長と黒田代表理事

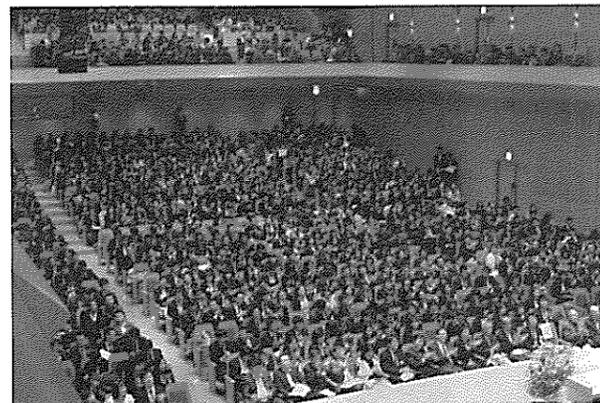
## フジ国際語学院卒業式 ホームステイ参加の学生も 文化の翻訳者となって



卒業生記念撮影

3月3日、フジ国際語学院（山中小白代表）卒業式に出席し、日本留学生の卒業を祝いました。学生たちの手作りによる卒業式は、先生方への感謝を見事なパフォーマンスで演出すると共に、日中友好の架け橋になるという決意が感じられ、感動的なものでした。また一昨年、教育交流ホームステイ in 山梨に参加した学生たちも無事優秀な成績で進学しました。ホームステイで得た貴重な体験を『文化の翻訳者』として生かしていくことでしょ。

荒川優子校長からは、「年会報に、学生の文章と写真が大きく掲載されていて嬉しく拝見いたしました。学生にとってよい思い出になるとともに、こうした文章が掲載されたことが自信につながり、進学にもきっと役に立つことと思います。本当にありがとうございました。」との言葉がありました。また、山中小白代表は「語学を勉強することは大事なことです。でももっと大事なことは、人間性を育むこと。」と語りました。式では中国大使館教育処白剛参事官、元重慶総領事他の皆さんが挨拶を行いました。白剛参事官は会場で、「教育処は要望があれば、いつでも懇談会の用意をして待っている。『教育処』の名称も、なじみのある『教育部』としたい」と述べました。協会からは山中・吉田の両業務執行理事が出席しました。



卒業生とフジ国際語学院教職員及び関係者

## 国内でも日中国際交流の確かな歩み

日本語スピーチコンテスト

中国教育国際交流協会、日本経済新聞社などが主催する第8回全中国選抜日本語スピーチコンテストが1月20日、都内で開催されました。来賓として出席した中国大使館韓志強公使は、「グローバル時代において、お互いを知る、歴史を知ること、そして自分の考えを主張することが大事だ」と挨拶しました。今回のテーマは「日本に紹介したい中国のことわざ 中国に紹介したい日本のことわざ」でした。コンテストには中国教育国際交流協会林佐平常務理事が出席しました。

## 第16次訪中団、第3回ホームステイ

### 参加者募集について

#### ●第16次訪中団

- 日時 2014年9月12日～9月17日  
(羽田前泊含む)
- 訪問地 上海市、南京市  
(学校訪問・史跡参観・教育交流)
- 募集人数 10名以上
- 費用 180,000円
- 詳しい問い合わせは協会事務局まで

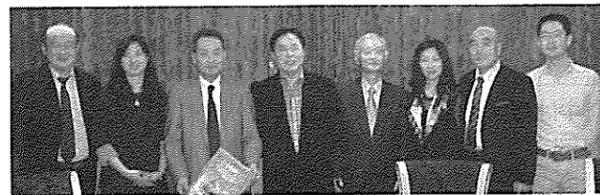
#### ●第3回教育交流ホームステイ

- (今年度は中国人留学生に限る)
- 日時 2013年8月8日～8月10日
- ホームステイ先 山梨県
- 募集人数 7名予定
- 費用 10,000円
- 詳しい問い合わせは協会事務局まで

○いずれの募集とも定員になり次第申し込みを締め切ります。

## 教育工会の白立文さんを訪ねました！

黒田代表理事・山中業務執行理事・赤岡理事の3名は、3月24日（月）に北京において、中国教科文衛體工會全國委員會國際代表の白立文さんを中華全國總工會へ訪ねました。和やかな雰囲気の中で交歓が行われ、今後の様々な活動の可能性について意見が交わされました。白さんから「中国は何事においても量から質への段階に入りました」という発言があり、心に残りました。



白立文代表を囲んでの記念写真

公益財団法人日本中国国際教育交流協会

会報 NO. 21

2014.11.17

# 共生力

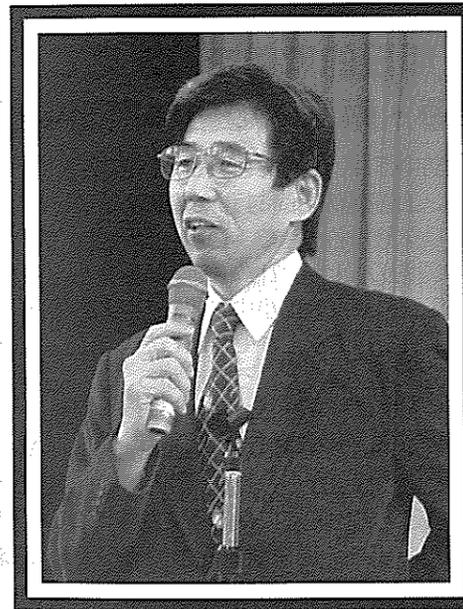
HP: <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>

Tel: 03-3222-4190 Fax: 03-3222-4199

〒102-0073 東京都千代田区九段北1-3-9 第2太陽ビル3F

発行人: 黒田文男

## 追悼 吉田一徳理事 ～お疲れ様でした～



去る6月28日に、当財団（日本中国国際教育交流協会）業務執行理事の吉田一徳先生が、膵臓がんのためご逝去されました。享年67歳という「まさに早すぎる死」を、むかえられました。生前吉田一徳先生と様々な場面で関わりを持った全ての人々が、その訃報に驚き、その死を惜しんだことと思います。吉田一徳先生は、誰にでも温かく心を入れて接するとともに、何事にも誠心誠意、真面目に、一生懸命取り組みを行いました。その人柄の素晴らしさについて、吉田一徳先生を知る全ての人々が、共通した思いを抱いていたことと思います。学校教育に、組合活動に、日中国際教育交流に、大きな足跡記してくれた吉田一徳先生を偲ぶとともに、大きな感謝の誠を捧げたいと思います。「吉田一徳先生、ありがとうございました。」「本当に、お疲れ様でした。」「心よりご冥福をお祈りいたします。」

## 吉田一徳先生略歴

- 1947・1 東京都文京区にて出生
- 1969・3 立教大学卒業
- 1969・4 台東区立浅草小学校勤務
- 1976・4 世田谷区立等々力小学校勤務
- 1986・4 世田谷区立深沢小学校勤務
- 1996・4 世田谷区教職員組合執行委員長
- 1997・4 世田谷区立八幡小学校勤務
- 2001・4 東京教組 書記長
- 2004・4 東京教組 執行委員長  
日本中国国際教育交流協会評議員  
(公益法人化のための特任評議員)
- 2007・3 東京教組執行委員長 退任
- 2010・4 日本中国国際教育交流協会常務理事
- 2010・8 (公益法人化に伴い) 業務執行理事
- 2014・6・28 逝去 (67歳)

## 「吉田一徳さんを偲ぶ会」が しめやかに行われました

10月4日（土）に、ホテルフロラシオン青山において東京都公立学校教職員組合・日本中国国際教育交流協会の共催する「吉田一徳さんを偲ぶ会」が催されました。日本教職員組合加藤良輔執行委員長、日政連神本美恵子・那谷屋正義両参議院議員をはじめ約100名もの関係者が集まりました。開会に先立って行われた出席者全員による黙祷の後、主催者を代表して黒田文男理事長が追悼の挨拶を行いました。引き続き代表者による「追悼の言葉」が、さらに「宋慶齡基金会」「易泉教育局」からの追悼メッセージの紹介と宋慶齡基金会作成の「メモリアルフォト＝訪中時の吉田一徳先生」が上映されました。吉田一徳先生を偲んでのスピーチの後、最後にご家族を代表して吉田直子様よりのご挨拶を頂きました。参加者一同、吉田一徳先生の人柄を偲び、業績を確認し、また悲しみを新たにしました。「吉田一徳さんを偲ぶ会」は、東京教組土井 彰執行委員長のお礼の言葉をもって閉じられました。

## 「吉田一徳さんを偲ぶ会」開会にあたっての 日中国際教育交流協会黒田代表理事の言葉

「本日は、本年6月28日にすい臓がんで急逝されました、吉田さんの「偲ぶ会」にご臨席賜り、主催者一人として、厚くお礼を申し上げます。この後、吉田さんとご縁の深かった方々のお集まりですので、思い出やエピソードを話していただけるものと思います。それに先立ちまして、私から一言、吉田さんのお人柄につきまして、お話しさせていただきます。私との交流は、吉田さんが日中国際教育交流協会の業務執行理事に就任され、始まりました。中国には、幾度となく同行していただきました。中国での相手方への配慮、私をたてる姿勢、何もかも自然でありました。一言でいえば、誠実な人でした。

月日が経過したある日、携帯に電話しましたところ、

奥様が応答されました。私は、体調が優れないと察しました。しかし、その後メールが届きました。まずは、電話に回答できなかった失礼を述べられ、最後に「今、苦しい」という文言がありました。吉田さんが「苦しい」と言われる。大変苦しかったと思います。それでもメールを送ってこられる。何と「律儀、誠実」であろうか。淡々と、誰に対しても驕らず、誠実に接せられてくれた人生でありました。人柄が良いことはもちろんですが、無私の心が成せる生き方でした。「野心・邪心・私心」のない人でありました。「日中国際教育交流協会」は、吉田さんの支えで今日までまいりました。吉田さん、ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。本日は、天国で良き友人たちの声を聴いてください。「徳ぶ会」の主催者の一人として初めにごあいさつさせていただきます。本日は、心よりの哀悼の意が表される会になることを願っております。」

中国宋慶齡基金会・易県教育部よりの弔文

公益財団法人日本中国国際教育交流協会  
 惊悉吉田一徳业务执行理事不幸逝世，我会全体同仁深感痛惜。吉田先生生前为促进中日两国人民间的友好，推动两国民间交流交往作出了积极的贡献。我们为失去这样一位热心中日友好事业的老朋友感到十分悲痛。  
 谨以此函表示沉痛哀悼，并通过贵会向吉田一徳先生家人转达我们的哀思与问候。 中国宋庆龄基金会副主席 井 頌泉  
 二〇一四年七月十日  
 弔文  
 悲報に接し、驚いて悲しみにたえません。この手紙で、吉田一徳先生のご逝去を悼み、また、ご遺族の方々のお悲しみはいかばかりかとお察いたします  
 日本中国国際教育交流協会の業務執行理事になさっていた吉田一徳先生が生前、中日両国民衆の友好と民間交流事業に力を尽くしました。中国宋慶齡基金会を通して、2009年から、日本中国国際教育交流協会は中国河北省易県で音楽教師の研修会を五回行ってきて、易県で中日教育交流も毎年行いまして、易県の音楽教師代表団も二回日本へ招待してくださいました。これらの活動は順調に完成して来たのは、吉田先生の苦勞と知恵は不可欠だと言えます。再び易県での教育事業、またに両国間の教育交流に心力を寄与した吉田先生敬意を表しており、心からご冥福をお祈りいたします。  
 2014年7月11日 易県教育局



第3回ホームステイin山梨大成功

「田中一郎記念奨学基金」の事業として、一昨年度から行ってきた中国人留学生のホームステイ事業を今年度も実施しました。第3回ホームステイは、8月8日から

10日までの3日間で、山梨県の教職員家庭（現職6・退職1）をホストファミリーとして行いました。今年度は、留学生側からの強い要望を受けて、募集人員を7名に増やしました。また、3日目の午前中に、笛吹市内の地域活動篠笛サークルの小学生と交流会を行ったり、退職教職員によって行われている「NPOまなびの広場ふえふき」の先生方に日本の折り紙体験を実施していただきました。最終日のまとめの会での発言の中にも、終了後提出してもらった報告書や感想文を読んでも、このホームステイの取り組みが、留学生・ホストファミリーのどちらにとっても交流・理解・信頼の進展に大いに役立ったことが確認できました。



今日的意義を踏まえて  
 上海・南京への第16次訪中国

第16次訪中国は、9月12日（金）から17日（水）までの日程で、上海市を中心に行いました。各県より15名の参加があり総勢19名（含む：通訳・添乗員）で実施しました。中国側の受け入れは、宋慶齡基金会（中国福利会）で、宋慶齡基金会の小中学校での学校視察及び授業参観・交流会を行うことができました。また、在外教育施設での国際理解教育という観点から、上海日本人学校の小・中・高等学校視察及び授業参観も実施しました。上海市及び南京市の見学は、近現代における中国と日本との交流という観点から、孫文（南京中山陵にて献花）・宋慶齡・魯迅・内山完造に係わる史跡等について研鑽を深めました。また、南京虐殺記念館での研修においては、あらゆる視点から日中関係の過去をしっかりとらえるという意味で、大いに意義がありました。さらには、犠牲者への献花も行い、日中関係発展の過去から未来への決意を示すこともできたと思います。



(1) 平成25 (2013) 年度事業報告

1. 教育交流・派遣事業

- ① 韓国安東市で開催された第7期安東自由大学には、教育学部として、8月31日から9月6日まで、芹沢団長以下11名が参加しました。8月31日には事前学習会を開催し、安東自由大学の歴史的、地理的意義を確認の上、団員は積極的に安東自由大学に参加し、友好と相互理解を深めようと、参加の意思を確認しました。9月2日の安東市長主催の招待宴を経て、3日のセッションでは、「東アジアにおける義務教育の課題」をテーマに、日本から「日本における義務教育の課題」、韓国から「『孝』の教育の意味」、中国からは「中国における義務教育」の報告をもとに討論が行われました。今回中国からの参加は初めてでした。参加者はまた河回村を訪問し、民俗芸能を体験しました。さらに教育学部参加者は、地元の臥龍初等学校を参観、懇談し、韓国の教育について理解を深めました。
- ② 3月23-25日、黒田代表理事ら協会理事3名は、中国宋慶齡基金会を訪問し、今後の事業の継続と発展を確認しました。一行は第3次宋慶齡基金会教育代表団の来日成功に感謝するとともに、今後の共同プロジェクトの支援地域について協議を行いました。

2. 教育交流・受入事業

- ① 平成25年度の宋慶齡基金会教育代表団の訪日招へいに伴い、『2013第5回河北省易県音楽教師養成セミナー』に、黒田代表理事以下協会役員ら8名が参加しました。共同プロジェクトが契機となって目覚しく発展している易県の教育の実情を見学するとともに、訪日団受入れに関する諸準備を検討しました。
- ② 第3次宋慶齡基金会教育代表団（唐九紅団長以下10名）は2013年11月5日から10日の日程で三重県津市で教育交流を行いました。三重県知事、教育長、津市長を訪問し、大歓迎を受け、その様子は地元紙にも大きく報道されました。歓迎レセプションは8月訪問者の再会などもあり、盛大に催されました。7日は、津市誠之小学校（馬場校長）での5年生の音楽の授業を参観、引き続き体育館での代表団との交流会は、和やかな雰囲気の中で行なわれました。交流では、活発な質疑応答が代表団と子どもたちの間で活発に交わされ、最後には小グループに分かれての給食で友好を一層暖めました。  
 また、参加した日本各地の教職員と誠之小学校、中国参加者との間で、意見交換会が行なわれ、相互理解を深めました。

3. 教育交流・支援事業

8月19~21日、黒田代表理事ら8名の協会代表団は宋慶齡基金会との共同プロジェクトである『2013第5回河北省易県音楽教師養成セミナー』に参加し、セミナーの視察と、教職員の要望を聞ききました。易県人民政府県長も参加し、「音楽授業のレベルをアップさせ、義務教育の教育レベルをアップする。中日両国の教育交流を積極的に促進する」と述べました。参加した約100名の教師からは、「合唱の指導について」「パソコンを使った音楽学習」「地域の文化も学べるので民族の特色ある音楽の勉強」「歌に感情がない」などの感想が寄せられました。一行はまた、易県第一小学校、大龍華中心小学校を参観し、子どもたちの歓迎を受けました。このプロジェクトに協会からセミナーの諸経費として100万円、易県への電子キーボードなどの学校備品支援相当分100万円を支援しました。北京では中国宋慶齡基金会井頌泉副主席と会談しました。

4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 『田中一郎記念奨学基金』の事業として、昨年度からホームステイ事業を実施しました。「第2回教育交流ホームステイ」は8月17-19日まで、山梨県の教職員家庭をホストファミリーに実施されました。参加学生は5名ですが、何物にも変えがたい貴重な交流ができ、若い世代が主役の日中友好の新しい教育交流の形を作り上げることができました。
- ② 第9回「日本語作文コンクール」（日中交流研究所・日本僑報社主催）は、中国全土から2938本の応募が

あり、中国青年の日本語学習の期待を集めています。今年度のテーマは「中国人の心を動かした『日本力』」でした。協会はこのコンクールの後援にあたっては、社会人・学生各1名に表彰状並びに、副賞として各5万円相当の賞品を「教育賞」として授与しています。

#### 5. その他の活動

今期は理事会を4回、評議員会を2回、監査を1回開催しました。また、5月15日、評議員選定委員会を開催しました。

1月29日、制度検討・役員選考委員会（前寫座長）を開催しました。

2月18日、事業計画懇談会（細井座長）を開催しました。日中関係が引き続き困難な中、協会の教育交流は粘り強く進められるべきだとの意見が多く出されました。

他に協会として、中国大使館公使参事官主催による中秋会、全中国選抜日本語スピーチコンテスト（中国教育国際交流協会他主催）、フジ国際語学院卒業式などに参加し、中国大使館や日中友好団体、文科省などとの交流を行いました。

広報関係では、平成26年1月に『会報20号』を発行し、「共生力」（随時刊）は、18（3月）・19（10月）号を発行しました。協会ホームページも随時更新しました。

## （2）平成26（2014）年度事業計画

日中関係は、国と国との関係では回復のきざしが見られませんが、民間においては粘り強い交流が進められています。

協会は昨年度、東アジアでの草の根教育交流を深く、多様に発展させました。宋慶齡基金会教育代表団は3回目を迎え、大きな成果をあげました。交流先の三重県、誠之小学校、三重県教職員組合からは心温まる歓迎をいただきました。河北省易県での音楽教師養成セミナーは年を追うごとに研修内容が充実しており、音楽を通じて、地域の教育発展、教育の格差是正の大きな力となっています。

また、第7期安東自由大学には中国が初参加し、東アジアの教育交流として発展する兆しが見られています。

中国人留学生と日本の教職員家庭との友好を深める「教育交流ホームステイ」事業は経験を重ね、参加した学生ばかりでなく、受入れたホストファミリーを基盤に、地域での日中友好、相互理解の輪を広げています。

協会の持続可能な活動を発展させるため、今年度は下記の教育交流事業を推進します。

#### 1. 教育交流・派遣事業

- ① 2014年度第16次訪中団（10名以上目途）を派遣するための準備を進めます。
- ② 韓国、中国、東アジアとの市民レベルでの教育・文化交流をすすめるため、第8期安東自由大学へ参加します。（5名以上目途）
- ③ 音楽教師研修事業をさらに発展させるため、易県地域でのプロジェクトに一区切りをつけ、新たな該地域の策定などの準備を進めます。

#### 2. 教育交流・受入事業

- ① 2015年度をめぐりに、現場音楽教師を中心とした「第4次宋慶齡基金会教育代表団」受入れのための検討を進めます。
- ② 中国教育国際交流協会、中国宋慶齡基金会、教育工会及びその他の教育諸団体から派遣する団体との教育交流、及び学校参観などの受入れ手配等を行います。

#### 3. 教育交流・支援事業

- ① 「音楽教師養成セミナー」への支援を継続します。また、新たなプロジェクト策定までの間、経過措置として、「易県音楽教師養成セミナー」への支援を継続します。
- ② 教育機器の支援は、新たなプロジェクト実施地域の実情をふまえて検討します。

#### 4. 教育交流・研究等助成事業

- ① 日本語作文コンクール（日本僑報社・日中交流研究所主催）の後援を継続します。
- ② 第3回教育交流ホームステイを実施します。
- ③ 教育現場や個人・団体の国際教育交流活動を活発化させるため、国際教育交流会議等を検討します。

#### 5. 機関運営などに関して

- ① 理事会、評議員会を年2回、監査委員会を年1回、常務理事会・事務局会を随時行います。
- ② 年会報21号を発行します。また、『共生力』を随時発行します。ホームページの充実を図ります。
- ③ 『公益財団法人制度改革・役員選考委員会』を継続し、事業の発展のための意見を出し合うとともに、役員等の選考、協会の組織についての検討を進めます。
- ④ 会員を拡大し、事業推進に関する理解を深めるために、引き続き代表理事のもとに、『事業計画懇談会』を設置します。

(3) 平成26 (2014) 年度収支予算

平成26年4月1日から平成27年3月31日まで (単位:円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
<b>I 事業活動収支の部</b>				
1. 事業活動収入				
① 基本財産運用収入	20,000	30,000	-10,000	
② 特定資産運用収入	3,000	4,150	-1,150	
③ 会費収入	6,800,000	6,800,000	0	
団体会費	6,700,000	6,700,000	0	
個人会費	100,000	100,000	0	
④ 事業収入	2,350,000	600,000	1,750,000	
教育交流・派遣事業	2,300,000	500,000	1,800,000	
教育交流・助成事業	50,000	100,000	-50,000	
⑥ 雑収入	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
事業活動収入合計	9,173,000	7,434,150	1,738,850	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出	18,966,000	14,666,000	4,300,000	
給料手当	2,340,000	2,340,000	0	
旅費交通費	10,550,000	6,050,000	4,500,000	
通信運搬費	190,000	190,000	0	
消耗品費	10,000	9,000	1,000	
印刷製本費	560,000	550,000	10,000	
賃借料	1,400,000	1,350,000	50,000	
諸謝金	50,000	50,000	0	
教育支援費	2,000,000	2,000,000	0	
研修助成費	1,000,000	1,200,000	-200,000	
委託費	620,000	630,000	-10,000	
会議費	105,000	130,000	-25,000	
交際費	125,000	150,000	-25,000	
雑費	16,000	17,000	-1,000	
② 管理費支出	3,635,000	3,615,000	20,000	
給料手当	780,000	780,000	0	
会議費	150,000	200,000	-50,000	
交際費	100,000	100,000	0	
旅費交通費	850,000	800,000	50,000	
通信運搬費	100,000	100,000	0	
什器備品費	100,000	100,000	0	
消耗品費	50,000	50,000	0	
印刷製本費	30,000	30,000	0	
賃借料	560,000	550,000	10,000	
租税公課	5,000	5,000	0	
委託費	860,000	850,000	10,000	
雑費	50,000	50,000	0	
事業活動支出合計	22,601,000	18,281,000	4,320,000	
事業活動収支差額	-13,428,000	-10,846,850	-2,581,150	
<b>II 投資活動収支の部</b>				
1. 投資活動収入				
① 特定資産取崩収入	4,000,000	10,000,000	-6,000,000	
訪中派遣費用準備資金	2,000,000	0	2,000,000	
教育交流支援費用準備資金	2,000,000	2,000,000	0	
教育交流事業資金	0	8,000,000	-8,000,000	
投資活動収入計	24,000,000	10,000,000	14,000,000	
2. 投資活動支出				
投資活動支出計	12,000,000	0	12,000,000	
投資活動収支差額	12,000,000	10,000,000	2,000,000	
<b>III 財務活動収支の部</b>				
1. 財務活動収入				
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
<b>IV 予備費支出</b>	1,272,000	553,150	718,850	
当期収支差額	-1,428,000	-846,850	-581,150	
前期繰越収支差額	2,700,000	1,400,000	1,300,000	
次期繰越収支差額	0	0	0	

(4) 平成26 (2014) 年度役員・評議員名簿

公益財団法人日本中国国際教育交流協会 理事・評議員・監査・顧問

(2014年12月1日現在)

理事 (9名)

赤岡直人 (業務執行理事)

伊藤宏美

黒田文男 (代表理事)

鈴木伸昭

芹沢秀幸

初岡昌一郎

前寫徳男

山中正和 (業務執行理事)

渡邊泓美

評議員 (7名)

井上定彦

宇佐美真

梶原貴

清水秀行

藤友公則

別所勝也

山中小白

顧問 (2名)

興石東

生井榮一

監事 (3名)

祝迫規之

中村武志

丸光昭



## ■ 協会の歩み

設立 1991年1月  
 1992年財団法人認可  
 2010年8月5日公益財団法人認定  
 公益財団法人移行 2010年8月9日  
 創立者 田中 一郎(初代理事長)  
 理事長 生井 榮一(第2代)  
 代表理事 黒田 文男(第3代2010年4月～現在)

### 教育交流・派遣事業

1992 私立学校教職員訪日中団(北京、大連)、第1次教育訪中団(北京、杭州。李鉄映国家教育委員会主任と会見)  
 1993 第2次教育訪中団(北京、瀋陽、撫順、大連。倪全人代常務副委員長会見)  
 1994 第3次訪中団(昆明、成都)  
 1995 第4次教育訪中団(ウルムチ、トルファン)、協会理事訪中団(北京。国家教育委員会、中国教育国際交流協会訪問)  
 1996 第5次教育訪中団(済南・青島、蘇州)  
 1997 第6次教育訪中団(日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念北京、天津、常州、蘇州。朱国家教育委員会主任と会見)  
 1998 第7次教育訪中団(北京、ハルビン、長春)  
 1999 第8次教育訪中団(南京、杭州、上海)  
 2000 第9次教育訪中団(昆明、大理、麗江)  
 2001 第10次教育訪中団(西寧、西安)  
 2002 第11次教育訪中団(日中国交正常化25周年記念。南寧、桂林)  
 2004 第12次教育訪中団(北京、承德)  
 2006 第13次教育訪中団(北京、天津)  
 2007 第1期安東自由大学参加団(韓国・安東市)  
 2008 第14次訪中団(北京、河北省易県)  
 第2期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)  
 2009 第3期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)  
 2010 第15次訪中団(北京、河北省易県)  
 2011 第5期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)  
 2012 第6期安東自由大学参加団(韓国・安東、大邱、ソウル)  
 2013 第7期安東自由大学参加団(韓国・安東、ソウル)  
 2014 第16次訪中団(上海・南京)

### 教育交流・受入事業

1992 中国教職員訪日代表团(東京、三重、神奈川、愛知、茨城、山梨、千葉、静岡)  
 1993 寧波市訪日団(東京、茨城、群馬、千葉)、常州市訪日団(兵庫、福井、三重)、寧夏自治区訪日団(愛知、富山、新潟)、中国教育国際交流代表团(東京、神奈川、静岡、神奈川、京都、奈良、兵庫、大阪。赤松文相と会談)  
 1994 江蘇省小学校長訪日団(神奈川、山梨、静岡)  
 1995 湖南省訪日団(愛知、静岡、三重)、蘇州市訪日団(千

葉、神奈川、山梨)  
 1996 モンゴル赤峰市職業教育代表团(東京、北海道)、常州市訪日団(千葉、山梨、東京)卒業生就職指導訪日団  
 1997 日中国交正常化25周年、財団設立5周年記念教育交流訪日団(東京、愛知、三重)  
 1998 蘇州市・昆山市訪日団(東京、福井、千葉)常州市訪日団(東京、山梨、三重、京都、奈良、大阪)  
 1999 北京市第二実験小学校訪日団(東京、神奈川、京都、大阪)中国優秀教師訪日団(東京、静岡)  
 2000 雲南教育学会訪日団(東京、山梨、千葉)  
 2001 中国教育交流訪日団(東京、山梨、奈良、京都、大阪)  
 2002 中国特殊教育工作者代表团(東京、三重)  
 2003 北京市崇文区教育関係者訪日団(東京、山梨)  
 2006 協会設立15周年記念中国教育国際交流訪日団(東京)遼寧省体育訪日団(東京、神奈川、滋賀、大阪)  
 2008 中国宋慶齡基金会教育代表团(第1次)(東京、静岡、愛知、京都)  
 2009 中国宋慶齡基金会李寧秘書長、協会を訪問  
 2011 協会設立20周年記念中国教育国際交流協会訪日団、中国宋慶齡基金会教育代表团(第2次)(東京、神奈川)  
 2012 中国宋慶齡基金会唐開生副主席、協会を訪問  
 2013 第3次宋慶齡基金会教育交流代表团(三重、京都)

### 教育交流・支援、助成等の事業

1995 中国人日本留学生に奨学奨励金制度を設ける  
 1996 雲南省災害教育復興資金(100万円)を贈る  
 1997 協会設立5周年記念教育交流集会・レセプション(東京)  
 1998 長江水害見舞金(100万円)を中国教育国際交流協会を通じて贈る。松花江水害見舞金(50万円)を黒龍江省教育委員会を通じて贈る。  
 1999 韓国中学校教育協議会名誉会長嚴圭白博士と田中会長・理事長会見  
 2001 中国教育国際交流協会20周年式典で、田中会長・理事長が顧問に就任。協会設立10周年記念教育交流集会(文部省後援、東京)  
 2002 日中国交正常化30周年記念教育交流集会・レセプション(文科省・中国大使館教育処後援、東京)  
 2006 協会設立15周年記念教育交流集会・レセプション(文部省・中国大使館教育処後援、東京)協会代表、中国宋慶齡基金会、河北省易県を訪問。  
 2007 生井理事長が中国宋慶齡基金会胡啓立主席と会談。河北省易県小学校へ机椅子600セット及び電子キーボード40台(総額200万円)の教育支援及び音楽教師養成セミナー支援。協定書締結。  
 第3回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。  
 2008 四川大地震に対し、見舞金(100万円)を中国教育国際交流協会を通じ四川教育国際交流協会へ。同じく見

舞金(50万円)を宋慶齡基金会を通じて贈る。また、ミャンマーサイクロン被害見舞金(50万円)をビルマ日本事務所を通じて送る。

第4回「中国人の日本語作文コンクール」を後援、教育賞を提供。日本教育公務員共済会より易県教育支援に関し、本部奨励金(100万円)を受ける。

2009 第1回音楽教師養成セミナー参加(北京、河北省易県)第5回「中国人の日本語作文コンクール」後援。  
 2010 公益財団法人日本中国国際教育交流協会へ移行。第2回音楽教師養成セミナー支援・参加(70万円)、第6回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。  
 2011 第3回音楽教師養成セミナー支援・参加(100万円)。第7回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。東日本大震災支援「こども音楽再生基金」へ寄附(100万円)。  
 2012 協会代表(黒田代表理事)以下4名が中国宋慶齡基金会(李寧秘書長)、中国教育国際交流協会(林佐平副秘書長)、中国教育科学文化衛生体育工会(万民東主席)を訪問。  
 第4回音楽教師養成セミナー支援(250万円)。第1回教育交流ホームステイ(in山梨)実施。  
 第8回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。フジ国際語学院スピーチコンテスト協賛。  
 2013 第5回音楽教師養成セミナー支援(200万円)(黒田代表理事、会員代表ら8名参加)。  
 第2回教育交流ホームステイ(in山梨)。  
 第9回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。  
 2014 協会代表(黒田理事長)以下3名が中国宋慶齡基金会(井頓泉副主席)、中国教科文衛體工会全國委員會(白立文國際代表)を訪問。  
 第5回音楽教師養成セミナー支援(100万円)送金。  
 第3回教育交流ホームステイ(in山梨)。  
 第10回「中国人の日本語作文コンクール」を後援。  
 (2014年12月現在)

## 公益財団法人日本中国国際教育交流協会とは

### ◆日本中国国際教育交流協会は

1991年に創立。東アジアの豊かな未来を実現するために、日本と中国を柱として、教育交流事業を進めています。子どもや教育の持つ「共生力」に限りない期待を寄せています。

### ◆公益財団法人とは

広く公益に資する事業を進めている法人として2010年内閣府から認定を受けました。公益法人は、寄付金に税はかからないので、支援がしやすいのが特徴です。

### ◆教育交流は4つの分野で

#### 1 派遣

教育に関心のある人たちによって構成された協会が派遣する団で、学校見学、授業の交流、子どもや教職員との交流を行い、未来の東アジアを地球規模で考えます。

#### 2 受入

諸外国からの教育関係の訪日団を受け入れ、学校訪問等を行い、教職員や子どもたちとの交流を深めています。訪日団の希望に沿って、教育現場の協力を得た研修への参加ができます。

#### 3 支援

教育困難地域の学校に、机や椅子などの学校備品のほか、電子キーボードなどの教育機器を送っています。また送った機器を使って授業が進められるための研修を支援しています。支援を受け入れる団体は、行政または信頼のおける団体です。

#### 4 研究等助成

田中一郎奨学基金を設立し、東アジアを中心に国際的な教育交流を担う人材を育成します。また、「日本語作文コンクール」「教育交流ホームステイ」などを通して、海外や日本で日本語を勉強している若者の学習を助成しています。

### ◆東アジアでのこの素敵な教育交流への参加をお待ちします。

個人会員	年会費	一口	5,000円
団体会員	年会費	一口	10,000円
寄付金	随時		

会員、寄附をされた団体・個人には、協会の年会報、「共生力」(随時発行の会報)、海外派遣への先行連絡、イベントのご案内など差し上げます。

### 【編集後記】

「許すことはできても 忘れることはできない」これは、侵華日軍南京大虐殺遭難同胞記念館に掲げられていた言葉です。様々な国際交流の場で、「未来志向…」という言葉や考え方がごく当たり前の様に語られます。その方向は全く正しいと思います。しかしながら、歴史的現在に生きる我々は、未来を語るときには決して過去に目を閉ざしてはいけないと思います。日本人は、ある意味で「狭い島国の中で生きる知恵」として、「水に流す」文化を大切にしてきました。そして「何事もいつか時の流れが解決してくれるもの」と信じています。しかしながら、過去に目を閉ざし心からの謝罪もない関係の中での未来志向は、欺瞞でしかないと思います。本物の未来志向は、まず、心からの謝罪から始まるのではないのでしょうか。南京で思いを新たにしました。(A)

### ■公益財団法人日本中国国際教育交流協会【会報第21号】

2015年(平成27年)1月30日発行

発行人…黒田文男 表紙題字…田中一郎(創立者) 印刷…(株)アートプリント

〒400-0031 山梨県甲府市丸の内2-32-16 甲府丸の内マンション302

Tel.055-269-6533 Fax.055-269-6534

HP: <http://www3.ocn.ne.jp/~koryu/>